

世

界遺産

石見銀山遺跡の 調査研究10

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 10

令和2(2020)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

世

界遺産

石見銀山遺跡の 調査研究10

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 10

令和2(2020)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

■例 言

1. 本書は、鳥根県教育委員会と大田市教育委員会が実施した令和元年度の石見銀山遺跡総合調査研究事業の概要と、県市担当職員及び調査関係者が同事業で行っている調査研究活動の成果を掲載するものである。
2. 石見銀山遺跡の総合調査研究は、大きく基礎調査研究とテーマ別調査研究の2分野で構成されており、令和元年度に実施した調査事業の概要をⅠにまとめた。また同年度に石見銀山に関係して発表された論文等の関連情報をⅡに掲載した。Ⅲでは県及び市が行う総合調査研究事業の成果の一部を掲載した。
3. 本書の編集は、大田市教育委員会教育部石見銀山課の協力を得て鳥根県教育庁文化財課世界遺産室で行った。

■目 次

Ⅰ 令和元年度の総合調査研究事業

1. 総合調査研究事業の概要	3
2. 基礎調査研究事業	
(1) 発掘調査	3
(2) 石造物調査	5
(3) 文献調査	6
(4) 科学調査	8
(5) 地図・地名、人権・同和問題調査	8
(6) 教育普及方法等調査	8
(7) 生物環境調査	8
(8) 資産保全調査	9
3. テーマ別調査研究事業	
(1) 経緯	9
(2) 新規テーマの検討	10
(3) 東アジア鉱山の比較研究	10
4. 調査専門委員会・調査整備活用委員会の開催	
(1) 第5回調査専門委員会	11
(2) 第6回調査整備活用委員会	11
5. 調査研究成果の公表	
(1) 鳥根県	12
(2) 大田市	13

Ⅱ 令和元年度の石見銀山遺跡関連報告書・出版物

報告書 論文 関係書籍等	17
--------------	----

Ⅲ 石見銀山遺跡関連調査研究

西尾克己・尾村 勝・新川 隆	
石見銀山遺跡における石垣の分類と変遷	21
鳥谷芳雄	
史料紹介 鳥根県立古代出雲歴史博物館所蔵の「銀山由来記」について	縦組 2 …54
伊藤大貴	
史料紹介 「惟高詩集」にみえる戦国期石見銀山関係詩文について	縦組 1 …60

I

令和元年度の総合調査研究事業

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 10

1. 総合調査研究事業の概要

島根県と大田市では、石見銀山遺跡の世界遺産登録を目指して平成8年度から総合調査を実施し、その成果があって平成19年7月2日に世界文化遺産に登録された。しかし、石見銀山遺跡については、その価値がわかりにくいこともあり、登録後も遺跡のもつ価値をより高めるために調査研究を継続して実施することにした。

世界文化遺産登録後に継続して行う調査研究は、それ以前から実施していた基礎調査研究（考古学的研究、歴史・民俗学的研究、自然科学的研究）に加え、テーマを絞り込み、多分野の研究者が共同して調査研究を行うテーマ別調査研究も開始することになった。

基礎調査研究は、発掘調査、石造物調査、文献調査、科学調査、間歩調査、地図・地名・人権同和問題調査などを組織的に実施しており、それらの成果はまとめ次第、報告書を刊行している。また、登録後には生物環境調査と資産保全調査なども追加して実施している。

テーマ別調査研究は、「最盛期石見銀山の復元」と「東アジア鉱山の比較研究」を大きなテーマとした、およそ3年周期の共同調査研究である。

この研究では、考古学、文献史学、歴史地理学、地質学、鉱山学、植物学などの外部研究者に石見銀山遺跡客員研究員として参加を求め、年2～3回の共同検討会を開催しながら進めている。

第1期の成果は、平成22年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』として刊行されている。しかし、わずか3年間の調査研究では「最盛期の石見銀山」を復元できたとは言いがたく、第2期の3年間も同テーマを継続して実施することになった。平成23年度から3年間にわたり銀流通とその拠点に焦点を当て、主に街道と港・港町を対象とした調査研究を行い、平成28年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書2』を刊行した。

平成26年度からは、「石見銀山鉱山町の変遷」を第3期のテーマとして、石見銀山の鉱山町を形成す

る大森町・銀山町の変遷と画期を明らかにするための調査研究を実施し、平成30年度末に報告書が刊行されている。

令和元年度は登録後12年が経過したこともあり、調査研究全体の見直しを含めた再整理・検討期間とし、基礎調査研究の再編、新規テーマ研究の検討を行っている。12月11日に第1回客員検討会を開催して、新規テーマの抽出方法等について協議したところである。令和2年3月2日の第2回客員検討会で新規テーマが決定され、来年度から研究を実施する予定としている。

本調査研究事業に伴う令和元年度の成果物は、発掘調査概要、石造物調査報告書、歴史文献調査報告書、本年報兼調査研究報告を刊行している。詳細は後掲の刊行物一覧のとおりである（島根県：今岡）

2. 基礎調査研究事業

(1) 発掘調査

令和元年度の調査

令和元年度は、平成30年度に引き続き仙ノ山地区と、大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区内に所在する金森家地点の調査を実施した。また、平成30年度と同じく、史跡地内・伝建地区内・世界遺産指定範囲内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には、試掘・立会調査を随時実施し、遺構・遺物の確認と記録を行った。なお、平成30年度末には佐毘売山神社地点において、境内地内における拝殿と本殿に挟まれた範囲と、本殿南西の礎石建物跡の調査を実施したが、昨年度の年報では報告できなかったため、ここで掲載する。

仙ノ山地区の発掘調査では、仙ノ山の北側に広がる平坦面（A区）と、仙ノ山北側の尾根上に広がる平坦面群（C区）、仙ノ山山頂（D区）にトレンチを設定した。A区では、土坑や溝状遺構などが検出され、当地における土地利用の状況が明らかとなった。ただし、昨年度の調査成果と同様に、礎石や柱穴などの建物に関する遺構や、石列などの地割に関連する遺構は検出されなかった。そのため、A区一



金森家地点東土蔵地下蔵

帯は、建物が並ぶような都市的な空間ではなかったと判断できる。出土遺物としては、貿易陶磁器や九州陶磁編年のⅠ・Ⅱ期に相当する肥前陶磁を中心に、16世紀末から17世紀後半の遺物が出土した。

C区では、地山の上に盛土をして平坦面としている様相が確認された。そのため、仙ノ山の北側に点在する他の平坦面も、同様の地形改変によって形成されていたと想像される。

仙ノ山山頂部では、自然地形に改変が加えられてはいないことが明らかとなった。また、岩盤への掘り込みは検出されたものの、明治期に三等三角点を設置した際の槽の痕跡であったことも判明した。江戸時代以前に遡る出土遺物も全くなき、山頂部においては積極的な土地利用がなされていなかったことが明らかとなった。

金森家地点では、修理整備事業に伴う発掘調査を平成28年度より実施している。主屋の修理事業は平成30年度で完了し、令和元年度には東土蔵床の解体工事が実施された。その際に、石造りの地下蔵(SX03)が検出されたため、記録調査を行った。SX03は、壁面には高さ24cmの延石を6段積み上げ、深さは144cmである。床面は1.9m 四方だが、北壁と南壁が一段あたり1～2cm程度ずつ内側にせり出している。最上部では東西1.83m、南北約1.9mとなっている。壁の上には梁をT字に配し、板状の割石を8枚載せ、さらにその上を粘土でふさいで天井としている。地下蔵の中央には支柱があり、天井を支えている。ただし、地下蔵の床面と、支柱が載る礎石下面の間には、床につもった砂やほこりが挟まれ

ており、この礎石は地下蔵が構築されてからかなりの時間が経った後に据えられたと判断できる。そのため、構築された当初の地下蔵は、内部に柱がない、広い空間であったようである。地下蔵内には中央の支柱以外にも、床面や天井に添木の痕跡が6か所ずつ残っている。切石と粘土でできた天井は相当に重いことが想像されることから、崩落の懸念などがあったのかもしれない。大森町内の住民には、戦後くらいの頃にこの地下蔵に入っていた記憶がある方もおり、近年まではその所在が知られていたようである。

佐毘売山神社地点では、本殿と拝殿下に設定したトレンチや、トレンチ南部の石垣に、文化15(1818)年に発生した火災の痕跡とみられる煤の付着や、被熱痕が確認された。また、火災ののちに境内地を西側に拡張している様相も確認できた。さらに、石垣の西端から約1mの範囲は、ほかの部分とは積石の様相が異なっており、前述した境内地の拡張に伴って石垣も拡張していることが確認された。礎石建物跡は、文化15(1818)年の大火によって焼失したと記録されている土蔵の痕跡とみられる。その後、再建されたと記録されているが、現在建物は失われている。発掘調査では、周囲に被熱痕や煤などは認められなかったため、火災後に礎石ごと建て替えられた可能性も考慮される。

令和元年度の調査にあたっては、5月21日と11月5日に大橋泰夫氏(島根大学教授)から、仙ノ山地区の発掘調査方針及び成果の検証と、令和2年度以降の発掘調査計画について指導を頂いた。



仙ノ山地点第5 トレンチ調査終了状況

公開事業としては、令和元年8月30日から石見銀山遺跡世界遺産センター情報コーナーにて調査成果に関する展示を随時公開している。令和元年8月25日には金森家地点において、現地公開を実施した。

(大田市：山手)

(2) 石造物調査

石見銀山遺跡の歴史的過程を石造物という観察対象を通して明らかにし、鉱山遺跡としての特性を把握することを目的に実施している。石造物には様々なものがあるが、現在は鉱山の衰退が直接的に反映されと考えられる墓石を重点的に調査している。

令和元年度の調査は、昨年度に引き続き龍源寺間歩上墓地の悉皆調査を行った。また、登り口に位置する妙像寺墓地の石造物6基も調査している。

龍源寺間歩上墓地は平成27年～29年度に調査を行った妙本寺上墓地の北西側に位置する丘陵先端部に所在し、龍源寺間歩栃畑谷側出口上までの尾根や斜面から栃畑谷側平坦面までの広範な部分である。分布調査時に約200基以上とされていた墓石の数が昨年度の悉皆調査の結果、約250基近く存在していることが判明した。これらは標高238～284mの尾根上及び斜面の広範囲に点在していたため、墓域を15のブロックに分けて調査を実施している。しかし、平成30年度の悉皆調査では全ての墓石を調査することが困難であったため、今年度の5月29日・30日・6月17日の3日間で残りの調査を実施して終了したところである。

全体の調査結果としては、一石宝篋印塔71基、一

石五輪塔31基、組合せ宝篋印塔41基、無縫塔6基、自然石墓標2基、位牌型墓標4基、円頂方柱型墓標類79基、地蔵7基、石殿4基、台座8基の総数253基の石造物を確認した。このうち168基の実測、152基の銘文調査を行っている。この中には地蔵のレリーフが3面に施された大型の宝篋印塔もしくは供養塔の基礎が確認されており、石見銀山遺跡の中では特異なものとして注目される事例である。

石造物が最も多く確認されたのは東側斜面中腹に造成された平坦面のB地点である。総数92基のうち68基が円頂方柱及び方形型墓標類が占めており、墓標を中心とする比較的新しい墓地の様相を呈していた。次いで尾根上に形成されたF地点で総数42基が確認されている。こちらは一石五輪塔や一石宝篋印塔・組合せ宝篋印塔などの墓塔のみで構成される古い様相を呈する墓域であった。その次のL地点も墓塔を中心とする古い墓域で38基の墓石を確認した。その他の墓域は20基までの少数の墓石で形成される小墓域となっている。

古い紀年銘の墓石としてはK地点で確認された天正15(1587)年の一石五輪塔が最も古く、次いで天正19(1591)年が刻まれたB地点の一石五輪塔1基とO地点の組合せ宝篋印塔1基、F地点の慶長3(1598)年が刻まれた一石五輪塔の順となる。隣接する妙本寺上墓地では天正13(1585)年の紀年銘が確認されており、ほぼ同時期に造墓が開始されたことが窺える。

また、F地点の尾根上では石殿の基壇が3箇所確認されており、周辺にはそれに関する屋根材などの部材の他に組合せ宝篋印塔、一石五輪塔などの墓塔が多数散乱している状況であった。墓塔の中には本来石殿に収められていたものも存在していたはずであるが、今回それを判別することはできなかった。なお、F地点の東側斜面に位置するJ地点の多数の石塔はF地点から転落したものと理解でき、F地点は石殿を中心に墓塔が密集して造立されていた様相が想像されるのである。

この龍源寺間歩上墓地の調査成果については、12月5日に調査指導会を開催して報告書作成に向けて



作業風景

有意義な意見を頂いた。また、来年度以降予定している、これまでに実施してきた調査成果をまとめた総括報告書の内容についても検討を行ったところである。

なお、この調査の詳細については、下記報告書に掲載している。

『石見銀山遺跡石造物調査報告書19－栃畑谷地区
龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地－』

(島根県：今岡)

(3) 文献調査

これまで文献調査においては、以下の4点を研究目的として調査研究と、石見銀山に関する文献史料の収集を進めてきた。

- ・石見銀山の支配・社会・技術・経済について解明をめざす。
- ・周辺地域を含め悉皆的に中近世史料の調査を行う。
- ・石見銀の国内流通（日本海水運等）、銀を介した対外貿易の情報を収集する。
- ・鉱山の比較研究へ向けて国内外鉱山史料の調査・収集を行う。

【文献調査実施状況】

大森町域または銀山料内に所在する商家・銀山師・地役人家に残された史料、また県外にて関係史料の調査を行った。令和元年度の主な文献調査の実施状況は次のとおりである（史料名、所在地、調査期間）。

- ① 熊谷家文書（大田市教育委員会寄託、通年）



下張り文書整理状況



石見銀山附地役人丸茂氏の書状

- ② 祖式収蔵庫、栄泉寺、宗岡家下張り文書（大田市教育委員会所蔵、平成31年4～6月）
- ③ 古代出雲歴史博物館所蔵近世石見銀山料関係文書群（古代出雲歴史博物館所蔵、令和元年8月～令和2年3月）
- ④ 石見銀山資料館保管阿部家文書（石見銀山資料館寄託、令和元年10～12月）
- ⑤ 国立公文書館所蔵石見銀山料関係史料（国立公文書館所蔵、令和元年9月）
- ⑥ 泉家文書（大田市仁摩町、令和元年8月22・23日、令和2年3月24～25日）

【主な文献調査の概要】

令和元年度に実施した文献調査の主な概要は次のとおりである。

- ① 熊谷家文書

熊谷家文書のうち、未整理分の目録作成に着手した。主な内容は茶道や和歌等の文芸活動に関する史料や幕末前後の書状類。このほか、勘定書や御通、銀山御入用銭諸払や城上神社の祭礼に関する勘定帳、御勘弁米買請人別帳、羅漢丁人別名前帳などの各種人別帳など。また、過去に目録を作成した一件袋史料(民事訴訟などに関係する代官所関係文書群)のうち、目録未済分が残されていた。こちらも今年度目録作成を完了した。なお、同時並行で写真撮影も実施中である。

- ② 祖式収蔵庫、栄泉寺、宗岡家下張り文書

祖式収蔵庫旧蔵下張り文書は、大田市の旧祖式収蔵庫にて保管されていた。特にその大半が18世紀半

ばにかけての銀山方役所宛ての文書あるいは同役所の帳面類で占められており、散逸した代官所文書を知る上で貴重である。一方で石見銀山附地役人丸茂（毛）氏に関する書状類も複数確認している。これらの書状には受取年月日、書状を届けた人物の名前などが記されている場合があり、丸茂（毛）氏の下で何らかの整理が行われていたと思われる。目録化を含めた詳細な分析は今後の課題であるが、丸茂（毛）氏旧蔵文書を貼り継いだ下張り文書の可能性が高い。また、栄泉寺下張り文書は幕末以降の文書で勘定帳・典籍断簡等が主体である。

一方で宗岡家下張り文書は17世紀末以降の邑智郡梁瀬村庄屋・尾原家関係の文書群（借銀証文、茶役銀取立帳、勘定帳等）を含むが、その他は19世紀代の宗岡家関係文書であった。特に注目したいのは天保5（1834）年頃の当主・宗岡長蔵が書いた日記。当時、地役人のうち同心格の者たちは銀山料内の口番所に半年交代で勤務していたが、本日記からは長蔵が江津口、大浦船表の各番所に勤務していた様子やその暮らしぶりがうかがえる。阿部光格日記と並ぶ地役人の日記として貴重だが、部分的にしか残存しておらず、復元が課題。また、邑智郡川本村付近に所有した屋敷や土蔵、小作地に関する帳面も残されており、同家の経営状況を知る貴重な史料といえる。なお、宗岡家住宅の修理時に外された襖には未調査の下張り文書が多数残されており、今後の整理が課題である。

③古代出雲歴史博物館所蔵石見銀山料関係文書群

近年古代出雲歴史博物館が購入した石見銀山料内の文書群を整理した。主に邇摩郡波積北村、磯竹村などの有力諸家の文書。磯竹村関係文書の場合は享保年間の砂鉄採取に関わる相論の証文が入っていた。波積関係文書の場合は波積本郷の頭百姓・石田家に加えて、同北村の頭百姓・山下家（屋号「鍛冶屋」）、同南村の頭百姓・嘉戸家（屋号「白兎」）、井田村庄屋の内田家（屋号「下井田」）の文書群である。最古は元和8（1622）年。いずれも庄屋をつとめたことのある家柄である。これまで波積地域の場合はたたら製鉄業を営む大地主・石田家が注目されてき

たが、石田家以外の有力諸家の様相を知るための手がかりや比較研究の対象となり得るだろう。

また、石田家文書については未整理分が残っており、今年度写真撮影を含めた整理を完了した。

④石見銀山資料館保管阿部家文書

石見銀山附地役人阿部家の文書群のうち、石見銀山資料館保管分を調査。これまで未撮影であった史料の写真撮影のほか、目録未済分の採録を行った。調査成果は文献報告書15で公表している。

⑤国立公文書館所蔵石見銀山関係史料

国立公文書館が所蔵する石見銀山関係史料の調査。同館所蔵「惟高詩集」に掲載されている漢詩文に石見銀山と山吹城の記述が登場する。本書で史料紹介をしている。また、この他に内閣文庫所蔵「石見国銀山文書」（白黒マイクロフィルムのみ所持）をデジタルカメラにて再撮影を実施した。

⑥泉家文書

邇摩郡宅野浦において廻船業を営んだ商家に伝来した文書。廻船業の諸帳簿、商品売買の仕切状、金銀貸借関係証書類が史料群の中核をなす。今年度は上記史料に加えて、近世後期の書状類等の束も調査した。邇摩・安濃両郡内だけでなく、出雲国杵築の白枝屋との関係も示す書状類や安政の大獄で処罰された頼三樹三郎に関する書状も確認している。毎年3月と8月に現地で史料調査を実施しており、調査は継続中である。

【文献調査指導会の開催】

文献調査を実施するにあたり、有識者から調査指導の助言を受けた。今年度は6月29日と令和2年1月13日の2回実施した。いずれも開催場所は島根県立古代出雲歴史博物館である。

【文献調査報告書の刊行】

毎年文献調査の成果として報告書を刊行している。概要は次のとおりである。

今年度は近世石見銀山附地役人をつとめた諸家（阿部・宗岡・河島家）の古文書目録を『石見銀山歴史文献調査報告書15石見銀山附地役人阿部・宗岡・

河島家文書目録』として刊行した。

今後も引き続き地役人に関係する古文書目録を刊行する計画である。（島根県：伊藤大貴）

（４）科学調査

石見銀山遺跡の実態を自然科学的な手法で解明する調査を行っている。

平成29年度に大田市教育委員会が実施した昆布山谷地区第5地点発掘調査において確認された精錬関係遺構（S X28）の灰層、ユリカス、ズリ、カラムについて平成30年度に分析を行い、その概要については昆布山谷の総括報告書である『石見銀山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』に掲載している。

令和元年度は上述した試料の詳細分析を実施しており、その成果について『石見銀山遺跡科学調査報告書4』として刊行している。（島根県：今岡）

（５）地図・地名、人権・同和問題調査

石見銀山遺跡の調査研究においても、近世の身分制度や現在の人権・同和問題を十分に理解し、歴史的事実の解明によって、これら諸問題の解決を目指すなくてはならない。本事業では、調査研究に加えて研修会と先進地における関連施設の視察を実施している。

令和元年度は、令和2年1月28日に島根大学名誉教授の竹永三男氏をお招きして、「「行き倒れ」た人々の声を通して人権を考える―近現代の日本における行旅病人・行旅死亡人―」と題して講演を行った。開催場所は石見銀山世界遺産センター、参加者は32名であった。（島根県：伊藤大貴）

（６）教育普及方法等調査

石見銀山遺跡の歴史的・文化的価値の情報発信を効果的に行うため、全国各地の教育普及施設や関連イベントについて視察・参加している。

令和元年度は新潟県の佐渡金銀山遺跡において、平成31年4月にガイダンス施設としてオープンした「きらりうむ佐渡」を視察した。

きらりうむ佐渡は、鉄骨造り1階建ての建物で、

外装の色彩などは相川の景観に配慮したものとなっている。展示室は坑道のような空間をめぐりながら、中世から現代につながる佐渡金銀山遺跡の歴史にふれることができるようになっており、特に金銀生産の様子をわかりやすく紹介した4つの映像シアターが印象的であった。（島根県：今岡）

（７）生物環境調査

石見銀山遺跡は「石見銀山遺跡とその文化的景観」という名称で世界遺産に登録されているように、かつての鉱山経営の痕跡が自然景観と一体となっており、残っている点が高く評価されている。このため、平成18・19年度に相関植生図の作成、生物相調査を実施し、代表的な自然環境相を有する地点・地域の把握を行った。その結果を受け、平成20年度からその年次変化を把握するための定期的な調査（モニタリング）を実施している。

生物相調査では、銀山川流域、山吹城跡登山道、金生坑～釜屋間歩、軻ヶ浦、沖泊、石見銀山街道の各地区の中で、必要な箇所をそれぞれ選定して踏査を実施し、確認された生物種や周辺の植生状況などを記録して自然環境の概略を把握した。調査方法は、踏査ルートを歩きながら生物相の記録を行い、コウモリ等の特定の生物相が見込まれる地点でその確認調査を実施した。生物相の記録は、短期的な影響が出やすい移動性の低い生物を中心とし、中・大型哺乳類や鳥類は適宜記録した。

上記の結果を踏まえ、対象地域の主要箇所から今後のモニタリング調査に適した箇所と項目を絞り込むとともに、継続的に実施可能な手法を検討した。それを受けて銀山川遊歩道、山吹城登山道、本谷地区、軻ヶ浦港、沖泊港について年2回（春・秋）の踏査を行い、指標種として設定した動植物の有無を確認するとともに、生物環境の概要を記録した。また、大久保間歩、矢滝城跡、石見城跡において、特定動植物（コウモリ類、洞窟性昆虫類、ギフチョウ、ラン類など）の調査を行い、生息状況を記録した。

現在までのところ、世界遺産登録以後の見学者の増加による、生物環境の大きな変化は見られないが、

今後も継続的に調査を実施していく予定である。

なお、調査については公益財団法人しまね自然と環境財団に委託して実施した。（島根県：今岡）

（８）資産保全調査

石見銀山遺跡に多く所在する石造物等について、劣化・損傷の原因を究明し、今後の適切な保存方法を検討するために実施している調査である。

令和元年度は継続調査として、龍昌寺に所在する、代官浅岡彦四郎墓と川崎平右衛門墓、豊栄神社石造物（水桶・灯籠）について劣化・損傷状況の経過観察を行った。また、石造物の保存環境のデータを得るため、浅岡彦四郎墓で温湿度記録計等を設置し、周辺の温湿度と石材の表面温度の変化を観察している。

また、福光石の劣化・損傷原因を特定するために、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の高妻洋成氏、脇谷宗一郎氏の指導を受けて、石材のプレパラートの作成や鉱物組成の確認、塩の有無についての分析調査を実施している。

この他に大久保間歩坑内で確認された明治期のドッグスパイク（トロッコ用のレールを枕木に留めるための釘）について、現地保存状況の確認と今後の保存処理方法を検討するために奈良文化財研究所の柳田明進氏の指導も受けている。

なお、このドッグスパイクは産業考古学会より2019年度の推薦産業遺産に認定されており、石見銀山の学術的価値を高める発見の一つと言える。

（島根県：今岡）

3. テーマ別調査研究事業

（１）経緯

島根県教育委員会では、石見銀山遺跡の価値をより高めるために、世界遺産登録前から行っている基礎調査研究に加えて、平成20年度からテーマを絞った調査研究をスタートさせた。

第1期のテーマ選定にあたっては、長年にわたって行われた発掘調査の成果や石造物悉皆調査などの

成果から石見銀山遺跡の最盛期の広がり进行を推定し、景観復元を主要なテーマとして「最盛期石見銀山の復元」を掲げた。

また、もう一つのテーマとして、世界遺産登録時の付帯事項としてユネスコから比較研究を要請されていることから、石見銀山と国内外の諸鉱山との関係解明を目的とした「東アジアの鉱山比較研究」をテーマに設定した。テーマ別調査研究は、考古学、文献史学をはじめ歴史地理学や鉱床・地質学など関係諸科学の研究者を客員研究員に委嘱し、島根県教育委員会・大田市教育委員会との共同研究として開始した。

この調査研究は1期を概ね3年間とし、平成22年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』を刊行した。しかしながら、計画していた報告の一部が集録できず、またわずか3年間の調査研究だけでは最盛期石見銀山の復元は困難であったため、計画していた再現イラストの作成を見送り、計画を変更して第2期も同テーマを継続していくことになった。

第2期は平成23年度から3年間にわたり銀の流通とその拠点をテーマに街道と港・港町を対象に調査研究を行った。平成27年度までに成果の集約を行い、平成28年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書2』として刊行されている。なお、第1期で掲載できなかったものについても同報告書で公表している。

「東アジアの鉱山比較」についても調査研究を同時に進め、上記報告書で公表しているが、平成25年度から3年間で実施した台湾鉱山との比較研究については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書3』として平成28年度に刊行されている。この鉱山比較についても3年間周期で終了すべき研究テーマとは言いがたく、今後も継続して調査研究を行っていくことにしている。

平成26年度からは「石見銀山鉱山町の変遷」をテーマとして第3期の研究に着手し、その成果については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4』として平成30年度末に公表した。

これまでの研究成果については上述したとおり報告書として刊行されているが、展示等の一般向けの情報発信に活かされていなかった。その反省も踏まえて、令和元年度は、一般に分かりやすく展示に活かせることができるテーマを再検討することになった。

テーマの見直し及び新規テーマ設定にあたっては、12月11日に第1回の客員共同検討会を開催して選定方法の確認を行った後、考古及び文献のそれぞれの部会でテーマ案を検討することになった。3月2日に第2回客員共同検討会を開催して、「港町温泉津の景観と変遷」をテーマとした研究を来年度から実施する予定である。

なお、本テーマ別調査研究の成果は、正式報告はもちろんのこと、本誌『調査研究』でも掲載し、随時公表することとしている。

本テーマ別調査研究にかかる客員研究員は以下のとおりである。

〈石見銀山の歴史〉

仲野義文（石見銀山資料館館長）

藤原雄高（石見銀山資料館学芸員）

西尾克己（松江市史松江城部会長）

鳥越俊行（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長）

〈東アジア鉱山比較〉

眞鍋周三（兵庫県立大学名誉教授）

佐治奈通子（東京大学大学院）

津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部長）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

（２）新規テーマの検討

上述したように新規テーマを検討するため、令和元年12月11日に考古学、文献史料、建造物等の各分野からなる第1回客員共同検討会を開催した。

新規テーマを検討するにあたり、これまでの研究の現状と問題点について意見交換を行い、問題解決に向けての方策の検討や、それに基づく新規テーマの選定方針を確認したところ、研究の主体はテーマに精通した新規の客員研究員にアドバイスを受ける

がら県市担当者が担うことになった。

テーマの抽出については、考古分野と文献・建造物分野でそれぞれ部会を開催してこれまでの基礎調査研究の成果からテーマ別研究に移行できるテーマ等を検討することになり、第2回客員共同検討会で確定させる方向となった。

12月24日に文献・建造物部会、令和2年1月14日及び2月3日に考古部会を開催して、各部会で具体的な展示を視野に入れた様々なテーマが抽出された。3月2日に第2回客員共同検討会を開催して、温泉津における温泉地の形成や町並み、文化などを明らかにするために「港町温泉津の景観と変遷」をテーマとして取り上げることになった。

（３）東アジア鉱山の比較研究

当事業は、石見銀山遺跡の特色を明らかにするために、東アジアに所在する各鉱山との比較研究を行うものである。研究の枠組みとして、島根県内の鉱山、日本国内の鉱山、東アジアの鉱山の3段階に区分して調査研究を行っている。

平成29年度からの東アジア鉱山比較研究では、東アジアに限定せず、同時代の世界各地の鉱山について国内の研究者から情報を収集し、石見銀山との比較が可能な研究項目の抽出を行って比較研究を進めることにした。

令和元年度の鉱山比較は国内鉱山と海外鉱山比較を併せた第1回客員検討会を9月4・5日に新潟県佐渡市で開催した。

国内鉱山比較では、石見銀山からの技術伝播が指摘されている佐渡金銀山との比較研究を行い、両鉱山の相違点を抽出して石見銀山の特質を導き出すことを目的として、これまでの調査研究成果について整理を行った。

海外鉱山比較では、絵画資料や美術品からみた鉱山開発技術、運営体制の比較などを検討したところである。

次年度以降も石見銀山の特徴をより明らかにするため比較可能な同時代鉱山の情報収集を行うこととしている。（島根県：今岡・伊藤徳広）

4. 調査専門委員会・調査整備活用委員会の開催

世界遺産に登録された平成19年度以降、平成25年度までは「調査活用委員会」の中で学術的調査や整備・活用のあり方などについて各分野の専門家から指導助言を受けてきた。

しかしながら、世界遺産登録後は遺跡の整備や活用、来訪者対策など様々な課題への対応が求められるようになり、1つの委員会で調査や保存管理を中心とした視点だけでなく、保存・活用など多岐にわたる課題を取り扱うには十分とはいえない状況となった。そこで、従前の「調査活用委員会」を、調査研究に関わる専門的な課題や方向性について協議する「調査専門委員会」と、調査研究に関する包括的な指導・助言、遺跡の保存管理及び整備活用に関する包括的な指導・助言を受ける「調査整備活用委員会」の2つに再編成することとした。

各委員会の構成は以下のとおりである。

〈調査専門委員会〉

井上 雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課長）
大橋 泰夫（島根大学法文学部教授）
岡 美穂子（東京大学史料編纂所准教授）
黒田 乃生（筑波大学大学院教授）
高妻 洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）
佐々木 愛（島根大学法文学部教授）
田辺 征夫（大阪府文化財センター理事長）
津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部長）
中西 哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野 義文（石見銀山資料館館長）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校教授）
松村 恵司（奈良文化財研究所所長）
山村 亜希（京都大学大学院准教授）

〈調査整備活用委員会〉

太田 洋子（熊谷家住宅 家の女たち代表）
川口 純（DOWA ホールディングス（株）執行役員）
黒田 乃生（筑波大学大学院教授）

高安 克己（島根大学名誉教授）
田中 哲雄（元東北芸術工科大学教授）
田辺 征夫（大阪府文化財センター理事）
玉串 和代（しまね国際センター理事）
内藤ユミイザベル（日本イコモス国内委員会理事）
仲野 義文（石見銀山資料館館長）
中村 俊郎（中村ブレイス（株）代表取締役会長）
村田 信夫（OFFICE 萬瑠夢）
和上 豊子（元石見銀山ガイドの会会長）

（1）第5回調査専門委員会

令和元年8月6日（火）に石見銀山世界遺産センターで開催した。出席委員は井上雅仁、大橋泰夫、黒田乃生、高妻洋成、佐々木愛、田辺征夫、津村眞輝子、仲野義文、松村恵司の9名であった。

委員会では総合調査研究事業の実施状況と当該年度の計画である①基礎調査研究、②テーマ別調査研究について報告と意見交換が行われた。特に文献調査研究については国内の史料調査に集中しすぎているので、銀の流通という観点から海外の史料調査も本格的に開始してもいいのではないかという意見もあった。

なお、前日の5日（月）には温泉津町のゆうゆう館や町並みの視察を行い、今まで温泉津町内で実施された発掘調査の内容報告を行った。世界遺産センター帰着後には温泉津出土遺物や大久保間歩坑内で発見されたドッグスパイクを実見し、保存処理方法等の指導を受けた。

（2）第6回調査整備活用委員会

令和元年11月12日（火）に石見銀山世界遺産センターで開催した。出席委員は太田洋子、高安克己、田辺征夫、玉串和代、内藤ユミイザベル、仲野義文、和上豊子の7名であった。

委員会では最初に仲野委員から「MSW 連携による石見銀山学習の実践について」と題した動画の視聴と報告をいただいた。これは地元大田小学校と大田高校の児童・生徒が作成した遺跡紹介のバリアフリー動画で、日本語に加え英語表記と手話により石見銀山遺跡を分かりやすく紹介するものであった。

次に世界遺産である「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の首里城跡の火災被害状況から、石見銀山遺跡における防火状況の報告を行った。

協議事項としては、石見銀山遺跡の観光動態、調査研究事業、遺跡整備及び建造物修理事業等についての報告を行い、これらに内包される多くの課題について活発な意見交換が行われた。特に多言語化とインバウンド対策について重点的に協議が行われ、多言語表記の難しさなどの意見が出された。

前日の11月11日（月）には大久保間歩・金生坑までの見学道の現状と大久保間歩坑内で発見された推薦産業遺産となったドッグスパイクの現地状況を視察した。（島根県：今岡）

5. 調査研究成果の公表

島根県と大田市では講座や講演会を開催して、調査研究の公表を行っている。

（1）島根県

島根県では大田市を除く県内及び島根県外に向けた情報発信として、石見銀山遺跡関連講座及び石見銀山遺跡パネル巡回展を実施した。実施状況は以下のとおりである。

【講座等】

[出雲市]

- 1) 日 時 令和元年7月28日（日） 10:30～15:00
- 2) 場 所 古代出雲歴史博物館（出雲市大社町杵築東99-4）
- 3) 名 称 「夏休み応援企画 令和丁銀づくりワークショップ」
めざせ！世界遺産石見銀山マスター in れきはく夏まつり
- 4) 内 容 ①世界遺産石見銀山ガイダンス
②ふれる！本物の丁銀をさわってみよう
③つくる！令和元年丁銀
④世界遺産石見銀山と世界遺産センター P R

⑤ワークシートを完成させよう

5) 参加人数 108名

[広島市]

- 1) 日 時 令和元年9月21日（土） 13:30～15:30
- 2) 場 所 中国新聞ホール（広島市中区土橋町7-1）
- 3) テーマ 「世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観」
講演「世界史の中の石見銀」
岡美穂子氏（東京大学大学院准教授）
「石見銀山遺跡とその文化的景観」
遠藤浩己氏（大田市教育委員会石見銀山課長）

4) 参加人数 314名

[東京都]

- 1) 日 時 令和元年9月23日（月・祝） 13:30～15:30
- 2) 場 所 東京証券会館ホール（東京都中央区日本橋茅場町1-5-8）
- 3) テーマ 「世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観」
講演「世界史の中の石見銀」
岡美穂子氏（東京大学大学院准教授）
「石見銀山遺跡とその文化的景観」
遠藤浩己氏（大田市教育委員会石見銀山課長）

4) 参加人数 260名

【パネル巡回展】

- 1) 内 容 石見銀山遺跡の価値や調査研究成果を紹介するパネル展示
- 2) 場所・日時
 - ①島根県立図書館（松江市内中原町52）
6月7日～7月2日
 - ②島根県民会館（松江市殿町158）
7月5日～7月16日
 - ③萩・石見空港（益田市内田町4597）
7月19日～8月25日
 - ④浜田合同庁舎（浜田市片庭町254）

8月26日～9月27日

⑤出雲空港（出雲市斐川町沖洲2633-1）

9月13日～12月1日

⑥島根県立しまね海洋館アクアス

（浜田市久代町1117）

10月2日～10月22日

（2）大田市

大田市では石見銀山学講座「ここまでわかった石見銀山～ここがすごい！明治時代の石見銀山」を開催した。

1）日 時 令和元年9月14日（土）

10:00～15:40

2）場 所 大田市民会館（島根県大田市大田町1128）

3）内 容

午前の部

基調講演

「世界遺産の新たな発見 推薦産業遺産
石見銀山の明治期ドッグスパイクおよび
レール」

大島一朗氏（産業考古学会理事）

推薦産業遺産認定証授与式

報 告

「石見銀山の近代遺産」

新川 隆（大田市石見銀山課）

「灰吹法と電気製錬／秋田・小坂製錬所では」

石見銀山を学び、伝える会

午後の部

報 告

「石見銀山御料郷宿泉屋遺宅金森家の保存
修理工事」

清水拓生（大田市石見銀山課）

「石見銀山御料郷宿泉屋遺宅金森家の発掘
調査」

山手貴生（大田市石見銀山課）

「大森町の赤瓦」

熱田貴保

（島根県立古代出雲歴史博物館）

5）参加人数70名

【古文書講座】

石見銀山世界遺産センターでは、市民向け教養講座として大田市主催の古文書講座を毎月開催している。上級・中級・初級の3コースで構成されており、各コース毎月1回開講している。中級・初級各コースの講師は島根県職員が対応している（参加者による自主的な運営がなされる上級コースを除く）。

各コースの概要は下記のとおり。上級コースは参加者による輪読会形式で実施されている。使用テキストは「事変以来雑書綴込」（山中家文書）など。参加者は6名。

中級コースは参加者9名。使用テキストは「阿部光格日記」（阿部家文書）、「源綱吉將軍御目見付在江戸日帳」（物部神社文書）、「浅利浦江朝鮮人漂着一件御用留」（山中家文書）である。

初級コースは参加者21名。使用テキストは「銀山方年始礼席等申送書・銀山附役人同心中間勤向品訳帳・石州無名異江戸役所御用留控」（松浦家文書）。このほか、阿部家文書所収の書状類なども使用した。

II

令和元年度の 石見銀山遺跡関連報告書・出版物

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 10

1. 報告書等

- ・『石見銀山遺跡発掘調査概要27』（大田市教育委員会、2020.3）
- ・『石見銀山遺跡石造物調査報告書19－栃畑谷地区 龍源寺間歩上墓地 妙像寺墓地－』（島根県・大田市両教育委員会、2020.3）
- ・『石見銀山歴史文献調査報告書15 石見銀山附地役人阿部・河島・宗岡家文書目録』（島根県教育委員会、2020.3）
- ・『石見銀山遺跡科学調査報告書4』（島根県教育委員会、2020.3）
- ・『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究10』（島根県・大田市両教育委員会、2020.3）

2. 関連論文

- ・成田研一「石見銀山薬石「無名異」の「水飛（水簸, 水干）」による製法について」『薬史学雑誌』54（日本薬史学会、2019）
- ・クッド研究所、建築資料研究社「世界遺産石見銀山と共に暮らす町：大森町（事例集 日本列島まちづくり；街並み・景観＋都市の顔）」『造景』（建築資料研究社、2019）
- ・遠藤寛之、森山昌幸、松村和典、藤原章正、神田佑亮、鈴木祥弘「安全性に着目したグリーンスローモビリティの導入可能性の検討 島根県大田市・石見銀山大森地区を例として」『交通工学研究発表会論文集』39（交通工学研究会、2019）
- ・山岡史朗「世界遺産石見銀山遺跡における急傾斜地崩壊対策事業（平成30年度第72回研究発表大会資料集）」『地すべり研究』63（全国地すべりがけ崩れ対策協議会、2019）
- ・小倉嘉夫、倉恒康一、中司健一、長村祥知、西田友広、目次謙一「大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」の翻刻と解説」『大阪青山大学紀要』11（大阪青山大学『大阪青山大学紀要』編集委員会、2019.3）
- ・黒田乃生、井上雅仁、仲野義文「〈原著論文〉近

世における石見銀山の森林利用と景観」『世界遺産学研究』6（筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻・世界文化遺産学専攻、2019.3）

- ・大島一朗「石見銀山で明治期の Dog Spike を発見（第1報）」『産業考古学』156（産業考古学会、2019.3）
- ・藤原雄高「2018年度全国大会 基調講演 石見銀山の藤田組経営時代」『産業考古学』156（産業考古学会、2019.3）
- ・林泰州「2018全国大会 基調講演 世界遺産石見銀山遺跡とその文化的景観：遺跡と自然とともに暮らすまちづくりとは」『産業考古学』156（産業考古学会、2019.3）
- ・中村宣郎「TOP INTERVIEW 石見銀山発信で幸せを支える足の裏のご縁（特集支える：裏方に徹するプロフェッショナル）」『マーケティングホライズン』734（日本マーケティング協会、2019.9）

3. 関連書籍

- ・宍道正年『親子で学ぶシリーズ第8弾 親子で学ぶ世界遺産石見銀山』（山陰中央新報社、2019.11）
- ・『石見銀山学ことはじめ series 3』（大田市教育委員会、2020.3）
- ・『石見銀山学ことはじめ series 4』（大田市教育委員会、2020.3）

4. その他（他鉱山）

- ・『佐渡金銀山遺跡佐渡奉行所跡整備基本計画書』（佐渡市教育委員会社会教育課、2019.2）
- ・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター『久村鉱山跡 選鉱場の調査 旧株式会社日立製作所安来工場久村鉱山』（国土交通省松江国道事務所、2019.3）
- ・渡部浩二「佐渡金銀山の「間切」と「間切改め」」『新潟県立歴史博物館研究紀要』20（新潟県立歴

史博物館、2019.3)

- ・日光市教育委員会事務局文化財課『足尾銅山の鉱害防除遺産群 世界文化遺産登録をめざして』(日光市教育委員会、2019.3)
- ・日光市教育委員会事務局文化財課『足尾銅山跡調査報告書9 (日光市文化財調査報告第12集)』(日光市教育委員会、2019.3)
- ・山田大隆「鳥取県若松鉱山の産業遺産」『産業考古学』156 (産業考古学会、2019.3)
- ・齋賀 英二郎「第4回研究発表会 近代化遺産の保存・活用に向けた調査・計画の事例 旧佐渡鉱山採鉱施設の場合」『文化財建造物研究 保存と修理』4 (文化財建造物保存修理研究会、2019.3)
- ・高村竜平、原山浩介、吉葉恭行、柴崎茂光編『近現代の地域開発と社会変化 秋田県の鉱山開発を踏まえて (歴史研究の最前線 vol.20)』(総研大日本歴史研究専攻、2019.3)
- ・尾小屋鉱山資料館「銅熱水鉱脈鉱床の手引書 尾小屋鉱山資料館へようこそ!」『ミネラ 鉱物・化石情報誌』58 (エスプレス・メディア出版、2019.4)
- ・渡邊大門『地域から見た戦国150年 7 山陰・山陽の戦国史 毛利・宇喜多氏の台頭と銀山の争奪』(ミネルヴァ書房、2019.5)
- ・矢ヶ崎善太郎「第一〇五三回例会 別子銅山の産業遺産」『史迹と美術』894 (史迹美術同攷会、2019.5)
- ・加藤正典『別子銅山・炭の古道 すべての道は「別子」に通ず』(2019.5)
- ・村田淳「ニュージーランド、オタゴ金鉱山地域」『鉱山研究』94 (鉱山研究編集委員会、2019.7)
- ・市川五郎、村田淳「伊豆の鉱山師、市川五郎の聞き語り」『鉱山研究』94 (鉱山研究編集委員会、2019.7)
- ・小田辰兵衛「持倉鉱山 (新潟県東蒲原郡) 製錬所撮影年次の考察」『鉱山研究』94 (鉱山研究編集委員会、2019.7)
- ・上田良「大久保政権期における貨幣制度と鉱山行政の再考察 明治政府と佐渡鉱山との関係を事例

として」『紀尾井論叢』6 (上智大学 Sapientia 会、2019.7)

- ・新町正「鹿児島県における銅山開発の概要について」『鹿児島考古』49 (鹿児島県考古学会、2019.7)
- ・長廣利崇、藤田和史「紀州の地域資源に関する調査 銅山を中心に (地域研究シリーズ55)」(和歌山大学経済総合研究所、2019.7)
- ・黒嶋敏「織田信長と銀山・撰銭令 (小特集 日本の中近世移行期における貨幣史)」『歴史学研究』988 (歴史学研究会、2019.10)
- ・久間英樹、福岡久雄「鉱山絵図の検証 (1) 佐渡金銀山大滝間歩および弥吉間歩」『技術史教育学会誌』21 (技術史教育学会誌編集委員会、2019.10)
- ・西藤真一「山陰・石見地方における港と都市の形成 商品流通を支えた北前船を中心に (特集日本海 まちと交通の今昔) - (日本海岸の都市まち今昔物語)」『運輸と経済』79 (交通経済研究所、2019.11)
- ・佐竹昭「幕末の釜石鉄鉱山と地域の森林資源」『たたら研究』58 (たたら研究会、2019.12)

Ⅲ

石見銀山遺跡関連調査研究

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 10

石見銀山遺跡における石垣の分類と変遷

ー銀山地区・大森地区を中心としてー

西尾 克己・尾村 勝・新川 隆

1. はじめに

本稿では、島根県大田市の石見銀山に所在する石垣を、石材の加工や積み方の違いで分類し、かつ中世末から近代までの変遷について考察する。

既に、石見銀山の石垣についてはテーマ別研究「銀山町の変遷」の「^{こぶやまだに だしつちだに}昆布山谷・出土谷の景観と変遷」⁽¹⁾でも触れている。これは分布調査や発掘調査の成果を基にしたものであり、鉱山が所在する仙ノ山山麓の昆布山谷地区に点在する屋敷跡を区画する石垣は、江戸時代中頃に用いられ、近世の鉱山集落の景観の重要な要素となっていることを指摘した。さらに、これまでの発掘調査から17世紀後半には小規模な石積み遺構が出現し、その後、割石積みや切石積みなどの技法が取り入れられたことも明らかにしている⁽²⁾。

今回の石垣の検討は、範囲を代官所がある大森の町屋と社寺も対象地に入れ、大森町全域を取り扱った。また、調査内容としては、石の積み方、石材の割石・切石の形態、石切り場も取り上げ、加えて社寺の棟札や古文書等にかかれた石工の動向も含め、大森町に所在する石垣を多面的に検討している。

2. 石垣の分類と変遷

(1) 石垣の分類

石見銀山地内に存在する石垣は、石材の形態や積み方などに違いが見られ、大きく3種類に分類することができる。その分類図が第2図～第4図である。

図中に示した石垣は、実年代の推定できる資料を中心に編年的に配置しており、変遷表（第1表）作成の基礎資料となるよう配慮している。以下では、その具体的内容を述べる。

I類 山石や河原石などの自然石を使用し、いわゆる野面積みのものである。石材は、大小様々で規

格性が見られない。積み方は、成層積み（布積み）系と乱層積み（乱積み・谷積み）系が確認され、成層積み系をI-1類、乱層積み系をI-2類に細分した。

I類の石垣は、敷地割の石垣や溝、河川の護岸など多岐にわたって使用されている。石見銀山附地役人の宗岡家地点で検出した石垣は、地表下約1mの深さで検出し、表通りとは垂直方向に伸びており、河原石を積み上げたものであった。検出層位、出土遺物から17世紀前半と推定され、現地割とは一致しない敷地割の石垣と考えられている。石銀地区で検出した敷地割の石垣や、本谷地区の側溝石垣も自然石を積み上げたもので、付近で採取された石材と推定される。

山吹城跡^{やすみやくしよ}と休役所跡の石垣では、直径1mを超える石を使用して構築されている。他の石垣には見られない規模で、銀山地内では他に例を見ない。両者は城館に関連する遺構で、特別な存在であった可能性が考えられる。また、安原谷地区^{おべに がたに}と於紅ヶ谷地区で敷地割の石垣に使用されている石も直径50cm程の規模で比較的大きな石材が使用されている。これらの石材は付近の転石を活用したと思われ、いずれも要害山や仙ノ山のデイサイトである。

このように、I類の石垣に使用されている石材は、



写真1 山吹城跡山頂部石垣



第1図 石見銀山遺跡調査地点配置図



写真2 休役所跡の石垣

河原石や転石など付近で容易に採取できる石を使用している。

Ⅱ類 割石を使用し、いわゆる打込み接ぎの範疇に入る石垣である。中には、割石の表面に一部工具痕が認められるものもあるが、基本的に表面には加工痕は残っていない。Ⅰ類に比べ石材間の隙間を減らし、大きさの均一化が進む。構築には石垣築造の専門知識と技術が必要で、専門の石工により築造されたものである。Ⅰ類と同様に、成層積み（布積み）系をⅡ-1類とし、乱層積み（乱積み・谷積み）系をⅡ-2類とした。この中で、成層積み系は19世紀後半からはほとんど見られなくなり、代わって落し積み（谷積み）が多用されるようになる。

Ⅱ類の石垣は、銀山地内で広く普及した積み方で、遺跡内外のいたるところで見ることができる。山内の屋敷地は谷筋の斜面に造成されている例が多く、平坦面を造成すれば必然的に段差が生じ、この法面の土砂崩落を防ぐために石垣が多く構築されており、中には高さ2mに達する石垣も見られる。大森



写真3 昆布山谷地区第5地点石垣（Ⅱ類）

地内においても、敷地境や側溝にⅡ類の石垣が用いられている。こうした石垣のほとんどは、地元産のデイスaitoを使用しており、石垣構築にあたって、近隣から石材を調達してきたものと推定される。⁽³⁾ 銀山地区と大森地区には、こうした石材を供給した可能性のある石切場が数か所確認されている。

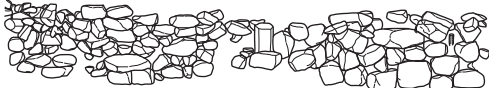
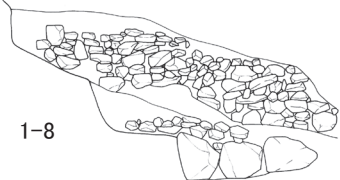
Ⅲ類 切石を使用し、いわゆる切込み接ぎの範疇に入る石垣である。石材は、地元産の硬いデイスaitoと搬入品の軟らかい白色凝灰岩とがある。石材は均一で、石材間の隙間はほとんどみられない。また、石垣面を直線的にするために表面は平らに整えられ、工具（鑿）痕（ノミキリ）が顕著に残る。この石材は不定形に加工され、隣接する石材を隙間なく密着させるために、すり合わせが丁寧に行われている。特に、白色凝灰岩は、石材の周囲を2～3cmの幅で平盤により平らに整えられており、あたかも縁取りに見える加工が施されている（写真4）。

形式では、Ⅰ類・Ⅱ類同様に、成層積み（布積み）系をⅢ-1類、乱層積み（乱積み・谷積み）系をⅢ-2類とした。

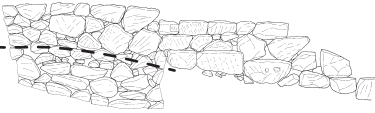
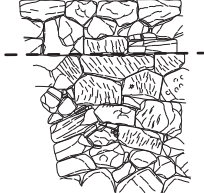
このⅢ類は、2類を中心に不定形の石材が隙間なく積まれており、見た目も美しく整えられている。特に、2類の石垣は目地が複雑にかみ合っており、石材がずれ難く、他の石垣より堅牢である利点から、寺院の本堂や神社の本殿・拝殿に使われていることが多い。また、熊谷家の地下蔵や護岸など、財力のある豪商の石垣に使用されたり、明治期の藤田組栃畑谷火薬庫跡基礎のように堅牢性を求められる施設に採用されている。特に、この火薬庫は堅牢さに注



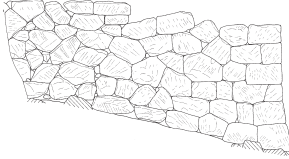
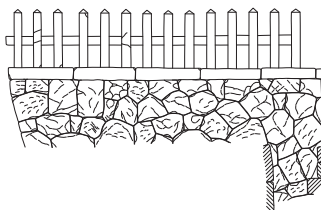
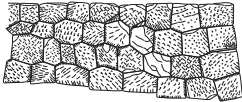
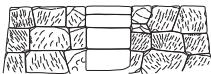
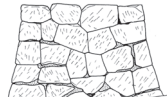
写真4 縁取りの加工（城上神社境内社）

類別 時期	I-1 類	I-2 類
16c後		1-1  山吹城跡 石垣(16c後半)  地中化城上前第4面 側溝石垣(16c後半) 1-2  地中化城上前第4面 側溝石垣(16c後半)
17c前	1-5 宗岡家地点 敷地割石垣(17c前半)  1-6 石銀地区 敷地割石垣(17c前半)  1-7 本谷地区 道路側溝石垣(17c前半)	1-3 休役所跡 石垣(17c初め)  1-4 宮の前地区 側溝石垣(17c前半)  1-8 安原谷地区 皿区石垣(17c前半)  1-9 於紅ヶ谷地区 石垣(17c前半) 
19c中		
19c後		1-10 佐毘売山神社前石垣(幕末～明治期か) 

第 2 図 石見銀山遺跡内石垣 I 類分類図

類別 時期	Ⅱ-1 類	Ⅱ-2 類
17c前		
17c後	 2-1 地中化城上前第3面 敷地割石垣(17c初)	
18c後	 2-2 昆布山谷地区第5地点 SK03石垣(17c後半)	
18c後	 2-3 昆布山谷地区第5地点 道石垣(17c後半～18c後半)	 2-4 出土谷地区Ⅱ区 敷地割り石垣(18c後半)
19c前	 2-8 林家地点 敷地割石垣(19c前半)	 2-6 昆布山谷地区第4地点 敷地割り石垣(19c初)
19c中	 2-9 宗岡家地点 北側溝石垣(19c前半)	 2-7 昆布山谷地区第5地点 敷地割り石垣(19c初)
19c後	 2-10 大賀家地点 床下溝石垣(18c後半～19c)	 2-11 栄泉寺 正面門石垣(19c～20c)
20c前		 2-12 城上神社 敷地割石垣(19c前半)
		 2-13 栃畑谷地区 藤田組事務所跡石垣(1887年、明治19年)
	 2-14 清水谷製錬所跡石垣 (1895年、明治28年)	 2-15 休谷火薬庫跡土手石垣 (1895年、明治28年)

第 3 図 石見銀山遺跡内石垣Ⅱ類分類図

類別 時期	Ⅲ-1 類	Ⅲ-2 類
18c後	3-1  羅漢寺 本堂石垣(18c後半)	3-2  昆布山谷地区第6地点 道石垣(18c後半)
19c前	3-5  栃畑谷地区 佐毘売山神社 本殿石垣(1814年、文化11年) 3-6  代官所 門長屋石垣(1815年、文化12年) 3-8  熊谷家 護岸石垣(1850年、嘉永3年) 3-9  豊栄神社本殿石垣(幕末)	3-3  熊谷家地点 地下蔵西壁(1801年、享和元年) 3-4  城上神社 本殿拝殿間相の間石垣(1815年、文化12年) 3-7  (1814年、文化11年) (1819年、文政2年) 栃畑谷地区 佐毘売山神社 本殿・拝殿間相の間石垣(19c前半)
19c中	3-10  神宮寺跡石垣(19c中) 3-11  大音寺跡 妙見堂石垣(1870年、明治3年)	3-12  旧井戸神社 本殿跡石垣(1874年、明治7年)
19c後	3-13  栃畑谷火薬庫跡石垣(1887年、明治20年) 3-14  松原小兵衛(熊谷家番頭)君碑石垣(1892年、明治25年)	3-15  高橋家石碑石垣(1908年、明治41年) 3-16  井戸神社 参道石垣(1916年、大正5年) 3-17  井戸神社 拝殿敷地割石垣(1916年、大正5年)
20c前		

第4図 石見銀山遺跡内石垣Ⅲ類分類図

力されたようで、石造りであったとの記録が残り⁽⁴⁾、現地には壁材と考えられる石材が散乱していた。

文化11（1814）年に建築された佐毘売山神社の本殿と拝殿は、文化15（1818）年に焼失して、文政2（1819）年に再建されている。石垣は、仙ノ山産のデイサイトが使われたⅢ類の石垣で、火災時に比熱したと推定される痕跡と文政2（1819）年に再構築されたと推定される痕跡を現存する石垣に見ることができる（第4図3-7）。こうした、建物建築や火災の記録は棟札や古文書⁽⁵⁾で確認されており、文字史料の記載を、現存する遺構で確認できる貴重な事例となっている。また、文化12（1815）年に再建された城上神社本殿にもデイサイトを使用したⅢ類の石垣が残されており、硬い石材を精密に加工する高い技術が見て取れる。

一方、城上神社拝殿には白色凝灰岩が使われており、同一神社で、同時期に建築された建物であっても石材に違いが見られる。他に、白色凝灰岩を使用した石垣では、代官所の門長屋、熊谷家の護岸石垣、旧井戸神社、大音寺跡妙見堂などがあり、大森地区

で多くみられる傾向にある。中でも、城上神社拝殿と大音寺妙見堂石垣の石材には白色の中に茶褐色の平行な縞模様が見られ⁽⁶⁾、再堆積により生成された石材と考えられる。

Ⅲ類の特徴は、不定形に加工された石材を組み上げて構築することに特徴がある。さらに、城上神社本殿石垣や豊栄神社石垣には石材（築石）どうしのすり合わせ（接合）部分を意図的に曲線に加工するものが存在する。（写真5・6）主には石材のずれを防止する目的と考えられるが、石工の技術の誇示や、視覚的効果も意識された可能性が高い。

大正5（1916）年に建設された井戸神社は、衆目の集まる正面部分には視覚的にも美しいⅢ類の石垣を使っている一方、目につき難い敷地側面にはⅡ類で高さのある石垣を構築している。目的に合わせた合理的な石垣構成と言えよう。また、今回取り上げた石垣の中でも最も新しいこともあり、落し積みを採用した石垣で、他とはやや異なる。

（2）石垣の変遷

石垣の変遷については、年代の判明している石垣を編年的に配置し、それぞれの石垣の形態的、技術的な変換期を画期として、5期の時期を設定した。以下では、その具体的内容を述べる。

1期（16世紀後半から末頃～Ⅰ類の出現期）

石見銀山に石垣が築かれるようになる時期は明確にすることができないが、山吹城跡の石垣は、周辺で採取された遺物などから16世紀後半から末頃まで遡ると考えられている⁽⁷⁾。前述の分類ではⅠ-2類に該当するもので、現段階で最も古い石垣と考えられ、この石垣の出現をもって石見銀山における石垣の初限としたい。ただし、石垣は城郭に関連するもので、後出する石垣とは、石材の規模が突出して大きいことが特徴として挙げられる。同様に休役所跡の石垣についても、16世紀に遡る可能性がある。他では、城上神社前の電線地中化事業に伴う発掘調査の第4面で検出された石組の溝も16世紀代に遡るとされており⁽⁸⁾、分類ではⅠ類に比定される。

このように石見銀山では、16世紀後半から末段階



写真5 城上神社本殿石垣（曲線加工部分）



写真6 豊栄神社大溝石垣（曲線加工部分）

第1表 石見銀山遺跡内石垣変遷表

	I 類	II 類	III 類	
特 徴	自然石を使用 野面積み 入手が容易な石材 石材の大きさが不統一 石工の手によらなくても構築が可能	割石を使用 打込み接ぎ 石材の定型化が進む 石工による築造 布積み・乱積みから落積みへと変遷	切石を使用 切込み接ぎ 石材を不定形に加工 石材のすり合わせを丁寧に行い隙間が無い 高度な技術が必要	
用 途	地割 溝 護岸等多用途	一般的な敷地の地割 ↓ 視覚的效果を重要視しない	寺社・商家・重要施設などで使用 ↓ 視覚的效果が重要視される	画 期
1 期 16 世紀後半から末～	I 類の出現			山吹城築城 休役所設置 地元デイスাইト使用
2 期 17 世紀初頭～		II 類の出現 II-1 II-2		江戸幕府の開幕 II 類の出現 奉行所が休谷から現在地に移転
3 期 18 世紀後半～			III 類の出現 III-1 III-2	III 類の出現
4 期 19 世紀初頭～			加工の細密化 横目地の曲線加工が開始	寛政の大森大火 (1800 年) 赤波石の導入
5 期 19 世紀後葉～		見られなくなる 落積みに移行	落積みに移行	藤田組の操業開始 (1886 年) 落積みへと移行



写真7 山吹城跡山頂部の石垣

には自然石を積み上げた石垣が出現すると考えられ、このⅠ類の石垣が出現する16世紀後半から末頃をもって石見銀山の石垣変遷のⅠ期とした。

この自然石を使用した石垣は、以後様々な用途の石垣に採用されており、使われる石材も河原石や山石など身近にある石材を使用し、積み方も多様な様相で展開しながら、連綿と続いていく。

2期（17世紀初頭～ Ⅱ類の出現期）

城上神社前の電線地中化事業に伴う発掘調査では、第4面の土層に位置づけられる第3面においても、石組の溝が検出されている。この溝は、割石を使用して石積みされており、遺構の時期が17世紀初頭とされている⁽⁹⁾ことから、17世紀初頭段階には割石による石垣構築が開始されていたものと考えられる。こうした割石による石垣の構築には、前段階と比較して、技術的な画期がみられ、この割石を使用した石垣の出現をもって石垣変遷の2期とした。

以後、割石を使用した石垣は敷地境や石組の溝等、以後の石垣構築の主流となっている。この時期の指標となるのは、前述の城上神社前の電線地中化事業



写真8 出土谷地区Ⅱ区の石垣

に伴う発掘調査第3面溝石垣のほか、昆布山谷地区第5地点石垣や出土谷地区Ⅱ区の敷地割り石垣等である。この中で、出土谷地区Ⅱ区の敷地割り石垣は隅角部を検出しており、算木積みとなっている。

3期（18世紀後半～ Ⅲ類の出現期）

昆布山谷地区第6地点で検出された石垣は、石材を不定形に加工した切石を使用し、石材間に隙間を生じさせないように意図されて構築されており、割石を使用した石垣とは明確に区別され、Ⅲ類に分類される。構築された時期については、出土遺物などから18世紀後半と考えられている⁽¹⁰⁾。石材間のすり合わせが不十分な部分も見受けられ、当該石垣の初現的な様相を示す。また、これ以前には同様の石垣が確認されていないことから、この石垣を同タイプの石垣の出現期と捉え、この切石を不定形に加工した石垣の出現をもって石垣変遷3期とした。時期は当該石垣の構築年代と推定する18世紀後半とする。

以後、銀山地区、大森地区において同様の石垣が多く見られるようになる。

また、昆布山谷地区第6地点で検出された石垣は、隅角部が算木積みとなっている



写真9 昆布山谷地区第6地点の石垣

4期（19世紀初頭～ Ⅲ類の完成期）

寛政12（1800）年の大森大火後、大森は建築ラッシュとなり、大火の翌年となる享和元（1801）年には、大森町で最大の商家である熊谷家の主屋が再建される。この時の築造と推定される地下蔵が発掘調査により検出されている⁽¹¹⁾。壁面の2面のみが残存していたもので、柔らかい石材である白色凝灰岩

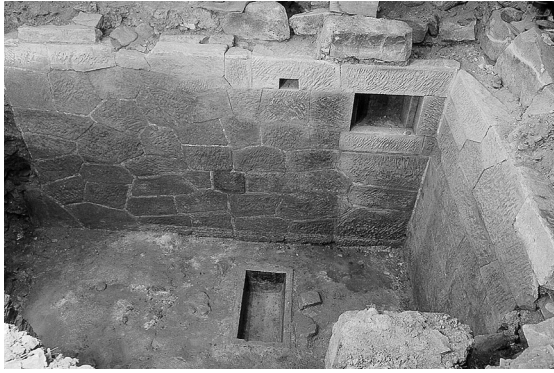


写真10 熊谷家地下蔵の壁面

を使用しているものの、石積みは不定形に整形された切石を精緻に積み上げ、石材間のすり合わせは丁寧加工され、隙間がほとんど見られない。さらに、湿気が染み出さないよう石材間は漆喰で目詰めされていた。前段の様相はよく解っていないが、技術的にはほぼ完成形に達していたと云える。

以後の石垣については、石垣の性格、重要度、資金面等の要因により、石垣の精緻度に差異が生じるようであるが、19世紀の前半頃からは多くの石垣においてⅢ類の石垣が採用され、石見銀山地域における石垣の特徴となっている。

したがって、19世紀初頭以後は不定形に整形した切石を使った石垣が技術的にも確立され、広く展開する時期として石見銀山の石垣変遷4期とする。

5期（19世紀末～ 藤田組による開発期）

石見銀山においては、明治期に入っても従来の技術を継承した前近代的な状態が継続していたが、藤田組の開発により様々な分野で技術革新が行われている。石垣においても、それまで3mを超えるような高い石垣はほとんど見られなかったのに対し、栃



写真11 清水谷製錬所の石垣



写真12 清水谷製錬所跡の巻石垣

谷地区三木工場跡や清水谷製錬所跡などで落し積みを用いた大規模な石垣が築かれている。一方、栃畑谷火薬庫跡ではⅢ類の石垣も築かれており、施設の性格、用途、規模などによって使い分けが行われていることも明らかとなっている。

こうしたことから、藤田組が開発を開始し、石垣の構築にも技術革新が行われた明治20（1887）年以降を石垣変遷5期とする。

また、清水谷製錬所跡では、石垣の崩落を防止するためと思われる巻石垣が石見銀山地内で唯一構築されている。（写真12）

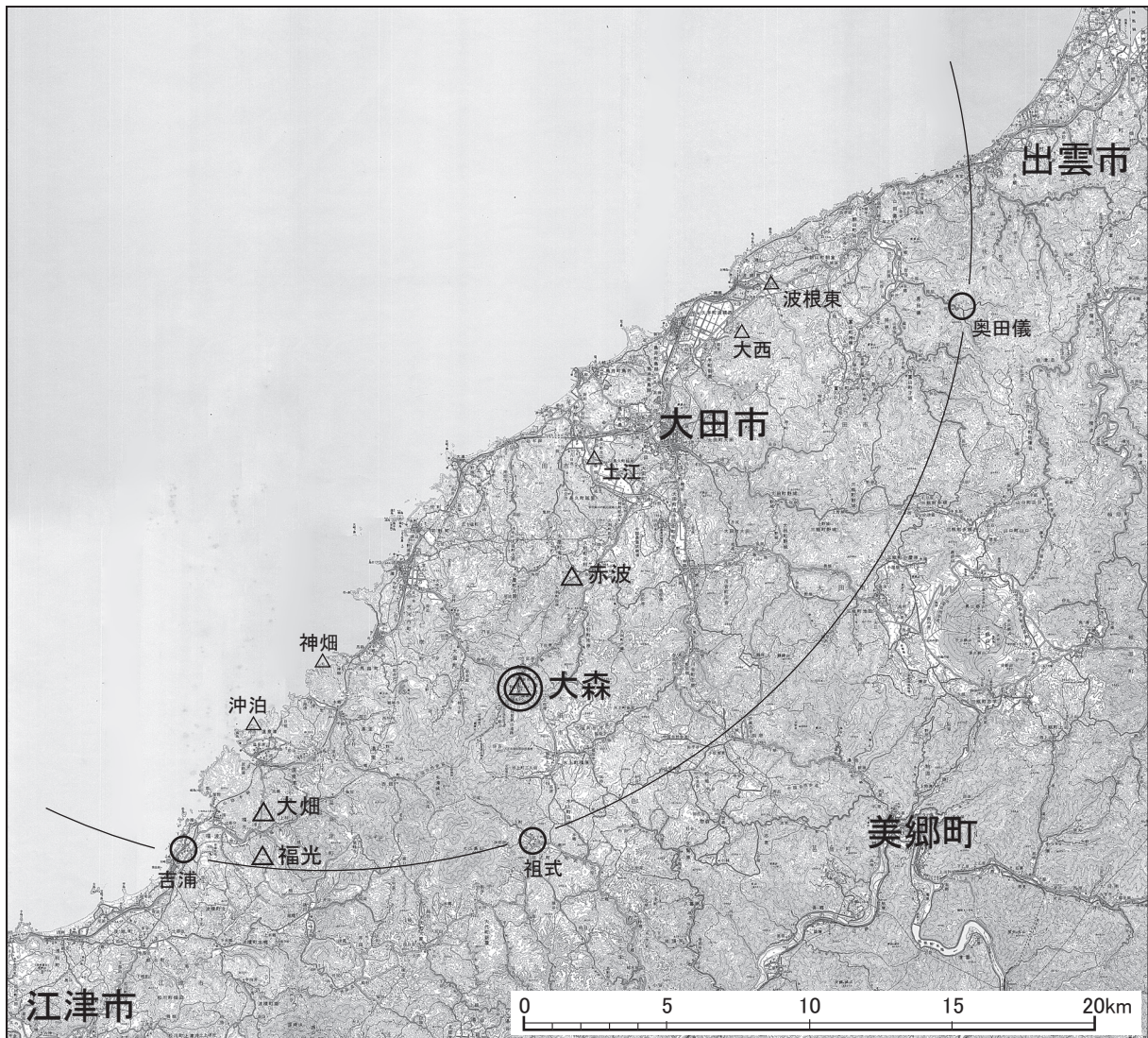
以上、石垣の年代観等から変遷を見てきたが、古い段階の石垣の隅角部はほとんど確認されていないので明確にすることは難しいが、18世紀後半段階と推定している出土谷地区Ⅱ区の敷地割り石垣（2期）と、昆布山谷地区第6地点の石垣（3期）は、両者とも隅角部が算木積みとなっており、石見銀山地内においては、18世紀後半段階には算木積みが採用されていたものと考えられる。

3. 石材の産地と石工

前章においては、石見銀山遺跡に所在する石垣について、石材の種類や構築法から3分類に分け、またその出現時期についても発掘調査の成果を参考に各々についてみてきた。本章では、さらに石材の産地と石工についても考察していきたい。

（1）石垣の石材

石見銀山遺跡の石垣については前章で分類・変遷を論じてきたが、その石垣の石材はどこから搬入し



第5図 石切場及びⅢ類石垣分布範囲

○はⅢ類の石垣確認場所 ▲は石切場

たかを述べてみたい。

石垣Ⅰ類 石材は山石と河原石である。山石は前記したように、近場の仙ノ山にある山石（デイサイトなど）を使って構築したものであろう。また、山吹城跡や休役所跡の石垣も要害山の転石を使用したと考えられる。一方、河原石については大森地区の宗岡家地点敷地内で検出された敷地割りの石垣があり、大森町を流れる銀山川の河原石と思われる。

石垣Ⅱ類 石材は割石が使用されている。既に述べたとおり、仙ノ山や要害山のデイサイトなどを使って構築したものである。銀山地区の昆布山谷地区や出土谷地区の敷地割り石垣をはじめ、大森地区の敷地割りや側溝の石垣は地元の石を使用している。その石切場は、銀山地区と大森地区内に数か所

確認している。

石垣Ⅲ類 石材は加工された切石で、石垣は極めて精緻に積み上げられている。石材については、Ⅱ類と同じデイサイトが多く使われているものの、軟質の凝灰岩も用いられている。前者は地元大森町内の石材であるが、後者は周辺部からの搬入のものが多。後者の凝灰岩は白、ないし黄色気味がかかる緻密な石で、多くは銀山川下流の久利町で産出されるあかなみ赤波石とみられる。地元でも「大森の繁栄で、需要が多かった」と記述され、大森地区の城上神社の造営にも石材を出したという。現在の拝殿の基礎等を見ると、赤波石が多く認められる。当時は、道路が整備されておらず、人や牛の背に載せて運んだと記録されている⁽¹²⁾。赤波石の採掘は戦後に入るとセ



写真13 赤波石石切場

メントにおされて衰退し、昭和30年代には廃業している。

（2）石垣Ⅲ類の加工技術と石工集団

Ⅲ類の石材は軟質な凝灰岩であり、堆積したことを示す平行模様（葉理）^{ようり}が認められものも多い。また、表面には鑿によるキリヌキ技法の加工痕が全面に残り、石垣の文様となっている。しかし、墓石のように加工痕を消して、研磨した例は見られない。

江戸時代後期には各地で、精巧に加工した切込み接ぎが城郭以外の石垣でも使用され、その表面加工にはキリヌキ技法が一般的に使用されていた。石見銀山遺跡周辺でも、19世紀にはデイサイトや凝灰岩の石垣にこの技法が採用されている。さらに、軟質の凝灰岩の場合には表面の縁辺部を、平鑿を用いて2～3cmの幅で鑿痕を消している。この縁取りにより、隣り合う周囲の石と石との接合する線が明瞭になり、石積みの横目地線や鋸歯文状・亀甲文状の文様が引き立つ効果がある。（写真4）この縁取りは19世紀初頭には出現し、現在まで永く用いられている。本稿では取り敢えず「縁取り加工」と呼ぶこととする。

「縁取り加工」に使用されている石垣としては、大森代官所、神社の社殿、寺院の伽藍（基礎）、有力商人の屋敷境の石垣、顕彰碑等の基礎など、限られた建物や施設に使用されている。この縁取り加工が認められる範囲をみると、石見銀山を含め、東は出雲市多伎町奥田儀の田儀櫻井家の金屋子神社（江戸時代末）、西は大田市温泉津町吉浦、南は大田市祖式町祖式までである。江戸時代の行政区分というと、石見国の仁摩郡と安濃郡、さらに出雲国神門郡

の西端を含む地域で、大田市大田町を中心に東西約30kmの範囲で、第5図の円弧内に収まる。

次に、凝灰岩の石切場を第5図に落とすと、ほぼ円弧内に収まり、さらに海岸部に多く集中していることが分かる。地質的に凝灰岩が多い地域であることも影響しているであろうが、船での運搬が可能であることも石切場開発の大きい条件であったと考えられる。今のところ、大田市内での確認されている凝灰岩の石切場は、東から波根町波根東一帯、久手町大西大師山、長久町土江、久利町赤波⁽¹³⁾、大森町石見銀山地内、仁摩町神畑⁽¹⁴⁾、温泉津町沖泊⁽¹⁵⁾、湯泉津町福光⁽¹⁶⁾が挙げられる。規模はまちまちであるが、福光石と赤波石はよく知られた石材で、福光石は現在も唯一切り出されている。各石切場とも、操業時期については江戸時代からであると考えられるが、史料も乏しく、その開始時期は分かっていない。幕末から近代にかけてのものと推定される。

石垣Ⅲ類の出現は江戸時代中期の18世紀後半であるが、史料的に確認できるのは寛政12（1800）年の大森大火以降である。19世紀初頭の大森復興における石垣普請が画期となり、これまでの石材は硬質のデイサイトが中心であったが、軟質の凝灰岩も採用され始める。この時期以降、幕末から近代にかけては大量に凝灰岩が石垣や建設資材に使用されるのである。今のところ最も古い構築物には、前述した熊谷家の地下蔵があり、享和元（1801）年に造られたものと云われている。技術的には、既に「縁取り加工」がなされており、また石と石の間には隙間もなく、完成度の高い積み方となっている。18世紀代のⅢ類石垣に関わった石工については、史料が残っておらず、今のところは不明である。Ⅲ類の凝灰岩の石材に関わる石工は、19世紀に入ると後述するように地元の石工等が活躍していることが文献史料等で押さえられる。

一方、デイサイトの石垣の積み方や加工にも変化が起り、大森大火以降は、より緻密な積み方のものが現れる。その画期になったのが、文化15（1815）年の大森地区の城上神社本殿と文政2（1819）年の銀山地区の佐毘売山神社本殿・拝殿の石垣普請である。棟札より、関わった石工は、前者が備前小嶋（児

島)の磯吉と佐蔵で、後者は備前の清治郎となっており、共に備前の石工で、遠方からの出稼ぎである。

最初に備前石工が関わった城上神社再建から佐毘売神社までは4年後である。石工磯吉と佐蔵の石垣が評価されて、再度の備前石工への依頼となったと考えられる。

今日に残る両社の石垣をみると、曲線をもつ石と石との接合面にも隙間がなく、高度な技術を有していた人物と考えられる。なお、岡山県南部にいた石工集団は「備前石工」と呼ばれ、江戸時代後半から近代にかけて石橋や石垣などの構築にあたり全国的に活動していた⁽¹⁷⁾。

(3) 史料と石造物に残る石工

前項では、主に石切場や石材についてとりあげたが、ここでは、それらを扱った石工について、棟札や石造物、文献史料などで名前が確認できるものの中から、主に石垣を扱ったと考えられる石工について考えてみたい。

現在までのところ、大森・銀山地区内に関連する石工で、確認できたものについては第2表にまとめているとおりである。文献史料等を十分に精査した上での成果ではないので、今後調査が進めば確認される石工は増えるものと予想される。

棟札で確認された石工は、古いものでは明和3(1766)年の羅漢寺石窟に関連するもので、建物の建築に伴うものとしては文化11(1814)年の佐毘売山神社本殿建設によるものである。より古い資料では確認されておらず、それ以前の石工については不明である。

表の中で、複数回確認された石工を見ると、文化12(1815)年の大森代官所(大森陣屋)と文政3(1820)年の城上神社天満宮に関わった増平と文化14(1817)年の城上神社長砂神社と文政3(1820)年の城上神社天満宮に関わった房次が見える。増平は大森町の新町、房次は大森町の駒ノ足に居住しており、両者は文化・文政期に大森町で活躍した石工であることが分かる。

また、同時期に大森町森山の甚兵衛が文化14(1817)年の城上神社境外社長砂神社本殿建築に関

わっているが、森山の地名も含めてよくわかっていない。文政6(1823)年の城上神社稲荷社本殿に関わった土佐只右衛門も大森町の下市に居住しているが、実態はよくわからない。ただ、この時期には複数の石工が大森に居住しており、城上神社などの造営に関わっている。

寛政12(1800)年の大森大火後は、大森町では復興景気に沸いていたと考えられ、文化12(1815)年には城上神社と大森陣屋という、大森にとって重要な施設が相次いで再建されている。この中で、大森陣屋の門長屋には前述の増平に関わっているが、町の復興に伴って石工の需要も増大していたものと推定される。

また、城上神社本殿建築には備前小嶋(児島)の磯吉と佐蔵及び福光村の十五郎が携わっており、わざわざ備前から石工が来訪して本殿建築に従事していることから、備前の石工を指名して招聘したものと考えられる。備前石工については前項で述べたとおりであるが、主に、硬い石材であるデイサイトを使った本殿敷地の石垣構築を担ったものと推定される。こうした状況のなかで、地元の石材産地である福光村の石工と合同で仕事を行っていることが注目される。石垣には福光石は使用されていないが、石材の調達などでは地元の石工の協力が不可欠であったことがうかがわれる。「熊谷家文書」の中には文化12(1815)年に福光の石工と思われる甚七が城上神社の玉垣を施工した記載がみられ、棟札には載っていないが、同時期に玉垣の構築も行われたよう

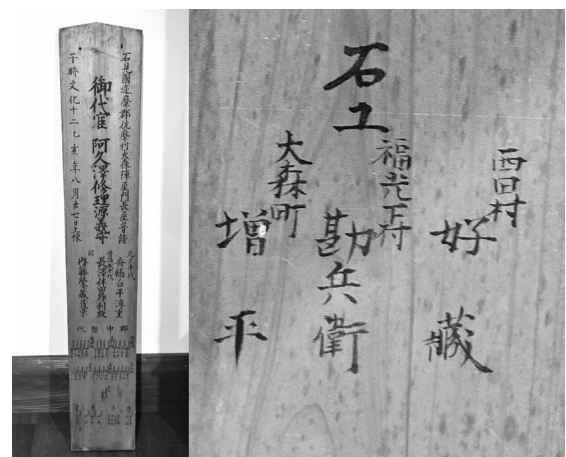


写真14 大森陣屋門長屋の棟札(左)及び拡大(右)

第2表 文字資料で確認された石工一覧

	年 代		場 所・内 容	石 工 名	出身地	備 考	文 献	
	西 暦	和 暦						
棟札に記載された石工	1766 年	明和 3 年	羅漢寺 尊像	尊像棟梁 平七利忠	福光本郷	福光石	文献①	
			羅漢寺 石室	石室棟梁 和田宗四郎	三刀屋	安山岩系		
				同石工 新七	三刀屋			
				同石工 太兵衛	三刀屋			
	1814 年	文化 11 年	佐毘売山神社本殿	藤右衛門	大森	仙ノ山 デイスайト	文献②	
	1815 年	文化 12 年	城上神社本殿	磯吉	備前小嶋□	デイスайト	文献②	
				佐蔵	備前小嶋□			
				十五郎	福光村			
	1815 年	文化 12 年	大森陣屋門長屋	好蔵	西田	白色凝灰岩 (赤波石)	原資料	
				勘兵衛	福光下			
				増平	大森			
	1817 年	文化 14 年	城上神社 長砂神社本殿	房次	大森町駒足	白色凝灰岩 (赤波石)	文献②	
	1816 年	文政 元年	城上神社 王子神社本殿	甚兵衛	大森町森山	白色凝灰岩 (赤波石)	文献②	
				吉田伊□				
	1819 年	文政 2 年	佐毘売山神社本殿・拝殿	清治郎	備前	仙ノ山 デイスайト	文献②	
	1820 年	文政 3 年	城上神社 天満宮本殿・通殿	増平 房次	新町 駒足町	白色凝灰岩 (赤波石)	文献②	
	1823 年	文政 6 年	城上神社 稲荷神社本殿	土佐只右衛門	下市	白色凝灰岩 (赤波石)	文献②	
	1860 年	万延 元年	清水寺本堂 (修理)	源作 林助 苗蔵 治平 喜代七 善七 喜七			文献②	
	1866 年	慶応 3 年	西本寺本堂	源作	大森町	白色凝灰岩	文献②	
	1870 年	明治 3 年	大音寺 妙見堂	留造		白色凝灰岩	文献②	
	1890 年	明治 23 年	波根田家住宅	山根佐吉 原田春造			文献③	
	1901 年	明治 34 年	西性寺経蔵	清水種吉 山根佐吉 清水富吉				
	1906 年	明治 39 年	豊栄神社通殿・楼門	原田春造 山根佐吉		白色凝灰岩 (赤波石)	文献②	
	1908 年	明治 41 年	西本寺小鐘堂	野津伊三郎 田中並吉 原田春造		白色凝灰岩	文献②	
	石碑に刻まれた石工	1719 年	享保 4 年	蔵泉寺口 題目塔	坪□□七	福光村	福光石	文献①
		1819 年	文政 2 年	無量寿院羅漢寺梗概碑	和田源四郎幸常	三刀屋		文献①
和田門助幸英					三刀屋			
1856 年		安政 3 年	極楽寺 身代地藏塔再建	坪内金兵エ	福光	福光石	文献④	
1856 年		安政 3 年	井戸公碑	恒七	福光	福光石	文献④	
1887 年		明治 20 年	西南之役紀年碑	鎌田常七	久利村		原資料	
	郷原平太郎			同				
	川上佐平			同				
石造物に刻まれた石工	1763 年	宝暦 13 年	羅漢寺 木蓮尊者	坪内平七利忠	福光	福光石	文献①	
	1765 年	明和 2 年	羅漢寺 迦葉尊者	坪内平七利忠	福光	福光石	文献①	
	1811 年	文化 8 年	勝源寺 地藏	坪内忠兵衛	福光	福光石	文献①	
	1849 年	嘉永 2 年	勝源寺 地藏	坪内忠兵衛	福光	福光石	文献①	
	1853 年	嘉永 6 年	狼谷入口付近 地藏菩薩	六四郎	波根東村		文献①	
	1862 年	文久 2 年	城上神社狛犬	石屋平兵エ	大坂西ほり	花崗岩	文献①	
	1867 年	慶応 3 年	豊栄神社狛犬	石工 棟梁 甚四郎	福光	福光石	文献⑤	
	1871 年	明治 4 年	城上神社玉垣	野坂□□		福光石	原資料	
	1884 年	明治 17 年	高砂神社灯籠	春造		福光石	原資料	
	文献に載る石工	1764 年	明和 元年	覚 (羅漢石仏代受領書)	多七 佐吉 吉兵衛 伝六 徳兵衛 清治郎 伝八 庄兵衛 甚七	福光下村	春木屋文書	文献⑥
1766 年 (1759 年)		明和 3 年 (宝暦 9 年)	当御料福光村坪内平七利忠 卯五月写	坪内平七利忠 同名多七利定 弟平七 孫平七 同名傳六 同名甚七 伴重五郎 甥重郎 同名徳兵衛守前 孫徳兵衛 伴半十 同名吉兵衛 同名猪兵衛利和 孫伊兵衛 弟伊助 同名理兵衛利治 孫百平 同名平四郎光永 孫小兵衛 同名傳八 同名庄兵衛 孫庄兵衛 同名喜七	福光	熊谷家文書	原資料	
1800 年		寛政 12 年	「福光村水没 (役か) 銀受取書」	平七 伊平太 □蔵 利兵衛 喜兵衛 小兵衛 藤吉 多三郎 十五郎 磯十郎 常吉 富五郎 栄蔵 喜代蔵	福光下村		文献⑥	
1810 年		文化 7 年	御用留	茂兵衛 房次		中村家文書	原資料	
1815 年		文化 12 年	城上神社石玉垣	甚七		熊谷家文書	原資料	
1840 年	天保 11 年	「福光村石工人議定書」	堂面庄兵衛 春木屋利兵衛 竹井屋義兵衛 蔵の段力兵衛 増田屋春吉 萩屋半重郎 上假屋浅吉 吉舎屋久平 山根角五郎 櫻戈勘兵衛 森脇秀兵衛 中祖政兵衛 中祖善吉 下組やぬい	福光下村		文献⑥		
			山口市右衛門 青木屋小兵衛 二郎田忠兵衛 竹や磯平 まつや恒八 中や紋三郎 小坂や惣七 谷口や岡平 鶴吉 古やしき多吉 大和や林平 上田や又兵衛	本領				
				林村				
1866 年	慶応 3 年	「田畑持高家数人別書上帳」	次平 磯吉	銀山町		文献⑦		
不明	不明	羅漢岩屋 惣しらげ みぞ切	十五郎 平七		熊谷家文書	原資料		
不明	不明	向陣屋敷井戸築替	藤右衛門		熊谷家文書	原資料		

※斜字体は朱文字



写真15 城上神社玉垣

ある。現地を確認すると、本殿と拝殿間には「文化十二年」と刻まれた福光石製の玉垣が残っており、この時に製作されたものとわかる。

時期がやや下った幕末頃をみると、万延元（1860）年の清水寺本堂修理と慶応3（1866）年の西本寺本堂建築に関わった石工に大森町の源作がみえる。また、明治3（1870）年の大音寺妙見堂に関わった留造も確認できるので、この時期には源作、留造が活躍していたものとみられる。清水寺本堂修理の棟札には7名の石工が記されているが、本堂修理に7名の棟梁に関わったとは考えにくいので、源作配下の石工であった可能性が高い。

明治期では、明治23（1890）年の大森町内の波根田家住宅、明治39（1906）年の豊栄神社通殿・楼門に関わった原田春造と山根佐吉の名前がみえる。原田春造は明治41（1908）年の西本寺小鐘堂にも関わっており、明治中頃から終わり頃にかけて当地で活躍した石工であるといえる。原田春造と山根佐吉は同じ棟札に併記されている例が2例確認できることから、一緒に仕事を請け負う機会も多かったであろう。西本寺小鐘堂には原田春造の他に野津伊三郎・田中並吉の名前がみえるが、他の資料には現れず、良くわかっていない。

福光は福光石の産地として、多くの石工が所在していたことは第2表からでもわかるが、棟札では十五郎と勘兵衛の2名が確認できる。両名は、「福

光村水没（役か）銀受取書」と「福光村石工人議定書」にそれぞれ名前が確認でき、確かに福光の石工であったことがわかる。十五郎については、羅漢岩屋の「惣しらげ」と「みぞ切」を平七と連名で行っており、岩盤の加工に従事していたことが判明している。また、十五郎の名が刻まれた石造物は現在まで確認されておらず、石造物製作ではなく、主に石材加工などをなりわいとしていたことが考えられ、石造物製作を行っていた石工とは異なった活動をしていた可能性が高い。同様に、勘兵衛作の石造物も確認されていないことから、勘兵衛も十五郎と同じく石材加工などをなりわいとしていたことが考えられる。言い換えれば、石工の中でも、石垣の構築や、建物基礎の製作等を担っていた石工の可能性が高いと言えるのである。こうした石工は、主に石造物製作に従事していた石工とは、職能的に住み分けがなされていたものと推定される。この石垣築造などを担った石工は、石造物に残された記銘を見ただけでは決して表には現れず、棟札や古文書を精査してはじめて確認できた石工である。

したがって、石垣築造を担った石工と石造物建造を担った石工では、作業内容、必要技術が違うことなどからも、通常、同一の石工が石垣と石造物の両方を手掛けていたわけではないと考えられる。

今回の調査をとおして、そうした石工の存在が確認されたことは一定の成果といえることができる。今回は、大森町と銀山町を対象に調査を行ったが、こうした石工はそれぞれの地域にも所在しており、各地域の土木事業を支えていたものと推定される⁽¹⁸⁾。

この他、石工の出身地に目を向けると、注目されるのは備前の石工で、城上神社に関わった磯吉、佐蔵と佐毘売山神社に関わった清治郎が挙げられる。近隣の石工ではなく、遠方の備前からわざわざ出向いて石垣築造に関わっているのである。また、出雲国三刀屋の石工集団である和田一門が羅漢寺の石窟及び無量寿院羅漢寺梗概碑の造立に関わっている⁽¹⁹⁾。和田一門は雲南産の花崗岩加工に優れていたと言われており⁽²⁰⁾、羅漢寺前の安山岩質の岩盤掘削に硬質石材加工の技術が活かされたものと推測される。

石造物では、文久2（1862）年の城上神社狛犬に大坂西ほりの石屋平兵衛の名前が確認される。地元産の石材と違い花崗岩の石造物であることから、大阪の石工に発注して建造したものと考えられ、大阪で製作して、北前船の西廻り航路で運ばれてきた可能性が高い。この他、波根東村の六四郎が狼谷入口付近に所在する地藏菩薩を製作しているのが注目される。第5図に記載しているように波根東は白色凝灰岩の産地であるので、地藏が収められている石室は波根東産の白色凝灰岩の可能性が高い。（写真14）

石造物に名前が記された石工を見ると、宝暦から明和にかけては羅漢寺の羅漢像をはじめとした尊像を福光の石工坪内平七利忠が手掛けている。文化8（1811）年と嘉永2（1849）年には勝源寺の地藏を坪内忠兵衛が製作しており、慶応3（1867）年の豊栄神社狛犬は福光の石工棟梁甚四郎が製作している。石材も福光石であることから福光の坪内一門の石工が福光石を使って製作したものである。特に、坪内平七利忠は、坪内5代目久兵衛の子で面屋（屋号）の初代とされ、数多くの石造物を残していることで知られる。⁽²¹⁾

文献史料に現れる石工では、羅漢寺の石仏製作の受領書である明和元（1764）年の「覚」が最古で、この時石仏製作に関わった福光の石工9名の名前が見える。福光の石工については、以後も度々史料に現れ、前述の「福光村水没銀受取書」では14名の石工が、「福光村石工人議定書」では26名の石工名が確認できる。また、熊谷家文書には坪内平七一門と



写真14 石工波根東村六四郎と刻まれた石室

考えられる石工が23名見える。内容をみるとそれぞれの続柄まで確認でき、代々名前を受け継いでいる実態も見て取れる。

文化7（1810）年11月の「御用留」（江津市桜江町「中村久左衛門家文書」仮2－銀1－16）には、茂兵衛と房次が現れる。61歳になった大森町の石工茂兵衛が石工の鑑札を伴う房次に譲ることを願い出たもので、茂兵衛と房次が親子関係にあったことが解る。ここに見える房次は文化14（1817）年に長砂神社本殿、文政3（1820）年に天満宮本殿・通殿を手掛けた房次と考えられる。天満宮の石垣はⅢ類の石垣なので、房次はⅢ類の石垣を構築する技術を有した石工であったことが分かる。その親であり、師匠でもあったと推測される茂兵衛もⅢ類の石垣構築技術を持った石工と思われ、房次が活躍する以前は茂兵衛が当地の石垣構築を担っていたと推定することができる。文化7（1810）年には61歳なので、それ以前の40年程度は茂兵衛が活動していたと考えられ、この時期は、Ⅲ類の石垣の様相が不明な18世紀後半にあたる。今後、茂兵衛の活動内容が明らかになっていけば、18世紀後半段階の石垣構築の実態も明らかとなるかもしれない。また、文化7（1817）年に鑑札を譲られた房次は当時年齢が18歳とあり、茂兵衛とは年齢差があることから、房次は茂兵衛の養子であった可能性もある。

また、年代は不明であるが、「向陣屋敷井戸築替」などを行った藤右衛門は文化11（1814）年の佐毘売山神社本殿建築に関わった大森の藤右衛門と同一人物の可能性が高い。この藤右衛門については、時期

文化七年 御用留 午十一月	同十二月（日カ）晴天 当番 藤井頼介 御中間 運平 良右衛門
大森町石工茂兵衛儀、当年年六拾壹才ニ 罷成ニ付、鑑札取上免除申渡、猶又伴房次 当年年拾八才相成、石工稼いたし度候間、水役 運上被仰付被下度、同町目代加印ヲ以 願書差出、糺之上鑑札愛渡請張印形 取之願通被付候段申渡候事	大賀覚兵衛 野沢左源太 嶋田儀兵衛 勝岡愛之助

史料1 「中村久左衛門家文書」 「御用留」（一部）

類別 時期	Ⅱ類	Ⅲ類
1887年 1888年 (M.20) (M.21)	現状 栃畑谷地区藤田組事務所跡 1887年(明治20) 立面図 操業当時 栃畑谷地区三木工場跡 1888年(明治21) 現状	現状 栃畑谷火薬庫跡 1887年(明治20) 立面図
1895年 (M.28)	検出遺構 立面図 操業当時 清水谷製錬所跡 1895年(明治28) 現状 石垣北面・東面 北面立面図 石垣西面 休谷火薬庫跡石垣 1895年(明治28)	アーチ状石組部 アーチ状石組部拡大 アーチ状石組部 立面図 (アーチ状石組右側部) 清水谷製錬所跡 1895年(明治28)
1917年 (T.6)	現状 立面図 柑子谷火薬庫跡前面石垣 1917年(大正6)	

第7図 藤田組関連施設石垣一覧図

は不明ながら、大田市五十猛町大浦の波止建造にも名前が見られ、大森を中心に手広く土木工事を請け負った棟梁であったと考えられる。

（３）藤田組施設の石垣

江戸幕府の支配下であった石見銀山は、明治期になると、一旦は新政府の支配下に置かれるが、すぐに民間に払い下げられる。明治19（1886）年に、鉱業権を取得した藤田組により再開発が実施される。藤田組は、鉱区を増区すると共に周辺の土地の買収も行い、同時に関連施設を順次新設するなど、近代化を進めている。こうした施設は、藤田組が官公署宛に提出した文書の控えである「要書録」^{（22）}に詳しく記載され、現地ではその遺構を確認することができる。石垣はそうした施設の敷地造成などで構築されており、比較的良好に残存している。

これらの石垣を見てみると、まず、藤田組による開発初期段階の明治20（1887）年に新設した佐鹿売山神社に隣接する事務所の石垣がある。割石を使用したⅡ類の石垣で、各所に落し積みがみられる。

一方、同じ明治20（1887）年に、栃畑谷最深部の斜面に建設された火薬庫の基礎にはⅢ類の石垣が採用されている。建物の性格上堅牢に建築する必要があったためと考えられ、精緻に積み上げられている。

また、明治21（1888）年に建造されたとされる栃畑谷の三木工場跡では、広大な敷地を造成するために高い石垣が築造されており、場所によっては高さ8 mにも達している。

明治28（1895）年建造の清水谷製錬所は、9段に及ぶ大規模な石垣が築かれている。ほとんどが割石

を使用したⅡ類の石垣であるが、中央付近のアーチ状をなす石垣部分は隣接する石材のすり合わせを丁寧加工したⅢ類の石垣である。この部分は建物内部にあたり、部材をはめ込んだと推定される溝も造られているなど、精密な石垣が要求される場所と考えられる。この場所での作業内容は明らかにはできないが、上部に被熱した痕跡があり、また溶解槽と考えられる水槽状遺構があるなど、製錬所内でも、重要な役割を担っていた場所と考えられる。このように、同一施設内であっても、緻密さが要求される石垣と、そうでない石垣とではⅡ類とⅢ類を使い分けている。

同じ明治28（1895）年に建築された休谷火薬庫跡は、建物本体はレンガ造りであるが、周囲には石壁や石垣が配されている。石積みは割石の落し積みを多用したⅡ類の石垣で、清水谷製錬所跡のⅡ類の石積みと類似している。

また、大正6（1917）年に建造された^{こうじだに}柑子谷火薬庫跡は、火薬庫自体は取り壊されていたものの、敷地前面には石垣が残されており、落し積みを多用したⅡ類の石垣であった。

このように、藤田組が構築した石垣にはいくつかの特徴がある。まず、栃畑谷三木工場跡や清水谷製錬所跡でみられる高い石垣が挙げられる。銀山地内では、それまでほとんど見られなかった3 mを超えるような高い石垣が構築されるようになっている。このことは、技術的な問題に加え、それを可能にした大資本の投入なしにはあり得なかったことであろう。次に、近世期には多用されていなかった落し積みを多用した石垣が挙げられる。この落し積みは、現在にまでつながる技法であり、藤田組の開発により多用され、以後の石垣には成層積みの石垣はほとんど見られなくなる。最後に、Ⅱ類とⅢ類の石垣の使い分けである。藤田組では、石垣の性格、目的、用途に合わせて石垣の積み方を巧みに使い分けている。栃畑谷火薬庫跡や清水谷製錬所跡のアーチ状石垣部分のように、堅牢性、緻密性などが求められる場所については、Ⅲ類の石垣を使い、緻密性が求められない場所についてはⅡ類の石垣を採用している。必要な所に必要な技術を使っており、実用性と



写真16 清水谷製錬所跡アーチ状石垣

合理性を兼ね備えた、大変理にかなった石垣を構築している。

4. おわりに

本論考では、石見銀山地内に存在する中世末から近代までの石垣を大きく3類に区分し、さらに時期も5期に分けて構築方法や加工技術について述べてきた。最後に、石見銀山での石垣の特徴的な事象と今後の課題について、分類別に述べて終わりとしたい。

I類は自然石を使用した石垣である。16世紀後半から末に山吹城跡（要害山）の山頂部と麓の休役所跡で部分的に築かれたものが残る。当時は毛利氏の銀山支配の時期にあたり、石見と安芸の城館に使用されている石垣との比較検討を行うことが必要である。但し、山吹城跡の石垣は図化がされていないので、早い段階での作業が求められる。また、大森地区にも、城上神社前の電線地中化事業に伴っての発掘調査で検出されたI類の石垣がある。この石垣と山吹城跡の石垣との比較を行い、時期や技法を検討する必要がある。



写真17 城上神社前発掘調査で検出した溝の石垣

II類は割石を使用したもので、銀山地区と大森地区では一般的な石垣である。時期は17世紀から20世紀にかけて築かれており、その石材は地元の仙ノ山や要害山のデイサイトが多い。出現は17世紀初頭に遡り、大森に奉行所が移動する以前の町並みに関連して使用された石垣と推定される。その後、銀山地区の昆布山谷等の鉱山集落でも、17世紀後半には屋敷境の石垣として本格的に採用されることになる。

近代に入り、明治20年（1887）頃には、大阪の藤田組が鉱山経営に参画すると、事務所等の施設に多用される。中でも、製錬所などの関連施設では大規模で、精巧な加工がなされた石垣が構築されている。石材は近世と同じく、地元のデイサイトであるが、石工については地元の石工か、他地域の石工も関わっての作業かは今のところ分かっていない。今後、藤田組が経営した県内の他鉱山の石垣と石工の状況を把握して、文献等の史料等もあたり、検討する必要がある。

III類の石垣は切石を使用している。これまでの発掘調査（昆布山谷地区）により、18世紀後半には構築されていることが確認されている。切石石垣の出現の背景については他地域の技術伝播も考えられるものの、今のところ、史料がなく不明である。石見銀山では、18世紀中頃の宝暦年間（1751～1764年）以降に銅生産が増大し、19世紀初めにはピークを迎えている。それに伴って、鉱山集落も拡大、整備されたと思われる、石垣の使用も関連していると考えられる⁽²³⁾。ただ、出現期の石工集団についてもよく分かっていない。

III類の発展期となる凝灰岩を使用する石垣が出現するのは、寛政12（1800）年の大森大火にかかる復興ラッシュによるものであり、時期区分では4期としている。その中で、熊谷家の地下蔵は享和元（1801）年に造られたとされ、白色凝灰岩の切石で精緻に加工され、隙間なく積み上げられている。この壁面を見ると、技術的には既に完成されたものであり、その系譜は18世紀代に遡るものであろう。この技術は明らかに新しいものであり、デイサイトを加工していた地元の石工が開発した技術とは考えにくく、他地域の石工が構築に関与したと推定される。今後、18世紀後半の大森以外でのIII類の石垣を網羅的に調べ、石工集団の情報を広く把握する必要がある。なお、石材の凝灰岩については、城上神社では久利町の赤波石が使用されているが、その他の社寺や町屋の石垣や基礎の石材はどこからもたらされたかも調べていく必要がある。

また、4期のデイサイトによるIII類石垣にも、新しい技術が導入されたことが、城上神社と佐毘売山

神社の棟札より知ることができた。それは備前石工の関与であり、文化・文政期には石垣のみならず、港湾施設、石橋普請などが盛んで、全国へ出稼ぎに出ていたとされる。前記の城上神社には、大坂西堀（大阪市）の石工が製作した狛犬が1対あり、西廻り航路で運ばれたものと考えられることから、備前石工の情報も広範囲に伝わっていたことであろう。

今回は、石見銀山遺跡内に所在する石垣の分類と変遷を述べてきた。この度の調査により、中世末から近代にかけての石垣構築と加工技法、材料の石材との関係、さらには石工の関わりについても、ある程度の見通しがついてきたと思っている。この成果を、石見銀山周辺の温泉津や大田の町並みにある石垣にも対象を広げ、石見東部における石垣の概要を把握することが今後の課題である。また、周辺部に分布する同時期の石切場の悉皆調査も、現地調査をはじめ、文献調査や聞き取り等も含め、実施していかなければならないと考えている。

本稿執筆にあたり、多くの方々のご協力とご教示を頂きました。石垣全般及び備前石工については丸亀市教育部総務課文化財保護室の乗岡実氏に、石材の鑑定については島根県立三瓶自然館の中村唯史氏から指導を得ました。文献史料の照会、及び翻刻については石見銀山資料館の仲野義文氏と島根県教育委員会世界遺産室の清水佳那子氏にご協力を頂きました。また、勝部衛氏、中田健一氏、田原淳史氏、藤原雄高氏、幡中光輔氏、山手貴生氏、清水拓生氏、熊谷家住宅家の女たち、石見銀山資料館からご協力を頂きました。記して感謝いたします。

第2表の参考文献

- 文献1 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告 5 石見銀山－分布調査と墓石調査の成果－』島根県教育委員会 2005
- 文献2 大田市教育委員会『史跡石見銀山遺跡総合整備事業別冊2 史跡石見銀山遺跡地内建造物〈10社寺〉調査報告書』大田市教育委員会 2013
- 文献3 大田市教育委員会「大田市大森銀山伝統的建造物群

保存地区保存事業概報49」大田市教育委員会 2000

- 文献4 永井泰 齋藤正『島根の石造物データ－狛犬を中心とした幻の石工達の実態にせまる－』2014
- 文献5 石造物部会「豊栄神社の石造物」『石見銀山遺跡調査ノート1』島根県教育委員会 大田市教育委員会 温泉津町教育委員会 仁摩町教育委員会2002
- 文献6 温泉津町誌編さん委員会『温泉津町誌上巻・中巻・下巻・別巻』温泉津町 1994～1996
- 文献7 仲野義文『銀山社会の解明 近世石見銀山の経営と社会』清文堂 2009

注

- (1) 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4』島根県教育委員会 2019
- (2) 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4』島根県教育委員会 2019
- (3) 銀山地内で転石を利用とした例として、大久保開歩前の溪流内に転落している巨岩には、岩を割るための矢穴が残されており、転石を利用していたことが分かっている。
- (4) 上野家文書13-4「要書録」及び同13-11「火薬庫其他建設書類綴」などによる
- (5) 「佐毘売山神社由緒書」による。「佐毘売山神社由緒書」は火災のあった翌月に書かれており、火事の記載は由緒書の中でも「当社焼失一件」に詳しく書かれている。
- (6) 三瓶自然館の中村唯史氏によれば、横方向に縞状の線が入る石材は、水の作用により再堆積した可能性が高いとの指摘を受けた。
- (7) 山吹城跡の石垣を構築した年代については、発掘調査などは実施されておらず、年代を推定する資料は表採された資料に寄らざるをえない。陶磁器をみると、龍泉窯青磁、景德鎮窯青磁に青花の他は備前焼などの国産陶器で、唐津焼などの肥前系陶器は一片のみ採取されているに過ぎない。一方、瓦を見ると、コビキBが確認されているのみで、コビキAは確認されていない。こうした遺物採取状況から、瓦葺建物については慶長期以降に建てられたと推定されるものの、前身建物の存在も考慮して、石垣の構築年代については、陶磁器の年代である16世紀後半から瓦葺建物が建築された可能性の高い16世紀末までとやや年代幅をもたせた間と推定している。
- (8) 調査を担当された中田健一氏のご教示による。溝埋土からの出土遺物にはわずかながら肥前陶器が含まれることから、16世紀から17世紀の可能性があり、今後の検討が必要である。

- (9) 中田健一氏のご教示による。また、中田氏からは原図の提供も受けた。
- (10) 発掘調査で、石垣構築面である道路面上で18世紀後半と推定される青磁染付（外青磁）などが出土しており、道路修復面からは19世紀前半の肥前磁器が出土していることなどから、石垣の築造年代を18世紀後半と推定している。
- (11) 大火後の再建時と推定される享和元(1801)年の板図が確認されており、図中の10畳間に地下蔵が構築されていることから、地下蔵の築造年代は享和元年の主屋建築時と推定されている。また、主屋建築後に、建物の基礎にも影響を及ぼす程の地下蔵の掘削は考え難い。
- (12) 福岡大眼『赤波のあゆみ』信楽寺 1960
- (13) 福岡大眼『赤波のあゆみ』信楽寺 1960
- (14) 鳥谷芳雄「沖泊軒ヶ浦における繫留遺構 付沖泊の石切場跡他調査報告」『石見銀山街道軒ヶ浦沖泊集落調査報告』鳥根県教育委員会 2005
- (15) 永井泰「大田市仁摩町神畑の流紋岩質軽石凝灰岩の海食崖に存在する石切場跡及び石材の使用例報告（1）」『鳥根県地質学会誌』第31号 2016
- (16) 温泉津町誌編さん委員会『温泉津町誌（中巻）』温泉津町 1995
- (17) 「備前石工」については、江戸時代前半には岡山藩の御用石工の活躍が目立つが、後半の19世紀前半（主に文化文政期）から明治にかけては、特に児嶋郡に本拠を置く民間向けの石工が中九州、江戸、函館など全国各地に出かけている。彼らは元は瀬戸内特産で硬い花崗岩を扱う石工で、大小不定形の石材を緻密にすり合わせて美しく仕上げる技術に長け、出張先ではその地域で採れる石材を用いている。（丸亀市教育部総務課文化財保護室 乗岡氏のご教示による）
- (18) 今回は取り上げていないが、例えば、「渡利家文書」には、元治元(1864)年に西田村の八幡宮拝殿普請に関わった石工で「当所石工勇八」の名前がみえ、地元で活躍した石工と考えられる。また、大森陣屋門長屋の建築に関わった好蔵も西田村の石工である。
- (19) 鳥谷芳雄「石見銀山の石造物にみる石工名」『石見銀山遺跡石造物 調査報告 5 石見銀山－分布調査と墓石調査の成果－』鳥根県教育委員会 2005
- (20) 永井泰「鳥根の石造物データ～狛犬を中心とした幻の石工達の実態にせまる～」『鳥根県の石造物データ～狛犬を中心とした幻の石工達の実態にせまる－』2014
- (21) 齋藤正「鳥根県（石見地区）・神社・仏閣の石造物の調査」『鳥根県の石造物データ～狛犬を中心とした幻の石工達の実態にせまる－』永井泰 齋藤正 2014

- (22) 上野家文書13-4「要書録」鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山近代史料集第1巻～第4巻』鳥根県教育委員会 2016～2019
- (23) 昆布山谷での変遷状況は「昆布山谷・出土谷の景観と変遷－発掘調査・石造物調査成果を中心として－」『石見銀山遺跡テーマ別研究調査報告4』で詳細に検討している。

引用・参考文献

- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ 1999
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』13 2003
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』16 2007
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』20 2011
- 大田市教育委員会『石見銀山遺跡発掘調査概要』22～26 2014～2018
- 大田市教育委員会『町並みと銀山 遺構確認調査概報1』2003
- 大田市教育委員会『史跡石見銀山遺跡総合整備事業報告書別冊1 史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』2013
- 大田市教育委員会『史跡石見銀山遺跡総合整備事業報告 別冊2 史跡石見銀山遺跡地内建造物〈10社寺〉調査報告書』2013
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究6～8』2016～2018
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4』2019
- 鳥根県土木建築事務所・大田市教育委員会『大田市埋蔵文化財調査報告書 第29集 主要地方道仁摩瑞穂線（門谷Ⅰ区）改良工事に伴う石見銀山遺跡端発掘調査 宮の前地区 調査概報』2003
- 鳥根県大田市『重要文化財 熊谷家住宅主屋ほか五棟保存修理工事報告書』2005
- 仲野義文『銀山社会の解明 近世石見銀山の経営と社会』清文社 2009
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告 5 石見銀山－分布調査と墓石調査の成果－』鳥根県教育委員会 2005
- 永井泰 齋藤正『鳥根の石造物調査－狛犬を中心とした幻の石工達の実態にせまる－』永井泰 齋藤正 2014
- 温泉津町誌編さん委員会『温泉津町誌上巻・中巻・下巻・別巻』温泉津町 1994～1996
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山近代史料集

第1巻～第4巻』島根県教育委員会 2016～2019

永井泰「大田市仁摩町神畑の流紋岩質軽石凝灰岩の海食崖に
所在する石切場及び石材の使用例報告（1）」『島根県地質
学会誌 第31号』島根県地質学会 2016

福岡大眼『赤波のあゆみ』信楽寺 1960

鳥谷芳雄「沖泊鞆ヶ浦における繫留遺構 付沖泊の石切場跡
他調査報告」『石見銀山街道鞆ヶ浦沖泊集落調査報告』島根
県教育委員会 2005

根本修「備前藩御用石工の系譜と石工集団」『岡山びとー岡山
市デジタルミュージアム紀要ー』通巻第6号 2008

北脇義友『岡山の石橋』日本文教出版社 2007

山口祐造『石橋は生きている』葦書房 1992

石造物部会「豊栄神社の石造物」『石見銀山遺跡調査ノート1』
島根県教育委員会 大田市教育委員会温泉津町教 育委員
会 仁摩町教育委員会 2002

廣江正幸 永井泰『狛犬見聞録』(株)ワン・ライン 2010

島根県埋蔵文化財調査センター『大西大師山遺跡一般国道9
号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報
告7』 島根県埋蔵文化財調査センター 2016

史料紹介 「惟高詩集」にみえる戦国期石見銀山関係詩文について

伊藤 大貴

はじめに

戦国期石見銀山関係史料については、これまで様々な調査が行われてきた。石見銀山歴史文献調査団による『石見銀山関係編年史料綱目』（島根県教育委員会、二〇〇二年）、井上寛司氏らによる『中世大田・石見銀山関係史料集』（大田市教育委員会、二〇一九年）をはじめとして史料集という形で成果公表されているが、井上寛司氏が指摘するように⁽¹⁾、依然として道半ばであり、従来の調査で漏れた史料の把握が課題となっている。

本稿で紹介する史料は、戦国期の禅僧によって記録された詩集に収められている。このような禅宗史料については従来あまり調査されていなかったが、後述するように、戦国期石見銀山の軍事拠点・山吹城に関する貴重な情報を得ることができる。そこで本稿では史料紹介に加えて若干の考察をしたい。

一、国立公文書館内閣文庫所蔵「惟高詩集」について

本史料の表題には「惟高詩集」とあるが、「惟高」とは臨済宗夢窓派の僧・惟高妙安を指している。まず、本史料の書誌情報に入る前に、先行研究に拠りつつ、惟高妙安について述べておきたい⁽²⁾。

惟高妙安は文明一二（一四八〇）年、近江国で生まれた。後に相国寺に入り、相国寺広徳軒主・瀑岩等紳の法を継いだ。師の瀑岩等紳が伯耆山名氏との繋がりを有したこともあり、惟高妙安も伯耆山名氏の知遇を得て伯耆国に下向。伯耆山名氏の

衰退後は出雲尼子氏との繋がりを深めて、永正一〇（一五一一）年から天文九（一五四〇）年にかけて山陰地方に滞在した。

前述のとおり、惟高妙安は長期間山陰地方で生活したことが知られているが、他方で相国寺や南禅寺といった京都の五山寺院の住持をつとめ、鹿苑僧録としても活躍した。また、衰退期に入った五山文学界を代表する学僧で「此西堂ハ（中略）^(利根)りこん第一の人也」と室町幕府重臣・大館常興が述べているように⁽³⁾、その才能は高く評価されていた。

次に「惟高詩集」の書誌情報を述べる。本史料は、現在国立公文書館（内閣文庫）が所蔵する。一丁表には「光源院」と「和学講談所」の朱印が押されており、相国寺光源院（もと広徳軒）、のちに和学講談所を経て現在の所蔵に至ったことがうかがえる。表紙の下部には「惟高和尚真蹟」と記されているが、柳田征司・朝倉尚両氏によれば、惟高妙安の個人詩集ではなく、編者も惟高妙安本人ではないという⁽⁴⁾。朝倉氏によると、惟高妙安周辺の僧が唱和・応酬された作品や著名詩軸・詩会作品などを備忘のために筆録したもので、永禄三（一五六〇）年暮から同四（一五六一）年春にかけて成立したと考えられるという。

二、「惟高詩集」にみえる戦国期石見銀山関係詩文

「惟高詩集」に収められている石見銀山に関する詩文は次のとおりである。なお、行間などには訓点や読み仮名、補足の文章が加えられているが、ここでは省略して本文のみ掲載する。なお、写真は本稿末尾に掲載している。

雲間 米原平内公今茲之夏、觀光上国而、寄筆

硯於吾院者、有曰于此、有志乎学、胤蜚康雪、孜孜読

書哦詩、其志可嘉矣、以有官命、俄然西帰、離索

之情無所消遣也、伝聞受邦君旨、雄扼石州産銀之

山城、撫循軍卒、深溝堅壘、韜略奇計、暗合孫呉者、

可見、凱旋翹足焉、時有便鷹、繫一詩於其猷云、

騷將詩壇論戰功、修文偃武最存忠、

銀山石壁茲城守、千里折衝帷幄中

惟高耆衲走筆

当該詩文は五丁裏から六丁表にかけて存在している。「惟高詩集」は惟高妙安とその弟子を中心とする詩文が収められているが、末尾に「惟高」とあるので惟高妙安が作成した詩文であることがわかる。ここに見える「米原平内公」とは尼子氏家臣で出雲国高瀬城主・米原平内兵衛尉綱寛を指す⁽⁵⁾。二次史料ではあるが、『陰徳太平記』には尼子晴久の「寵童」と記される人物でもあった。

内容は、①上洛した綱寛が「吾院」に滞在して勉学に励んだが「官命」により俄に帰郷したこと。②惟高妙安が伝え聞くところによると「邦君」の指示で綱寛が「石州産銀之山城」を守備したこと。③山吹城の綱寛と京都の惟高妙安の間で連絡を取り合った際に詩文を贈ったことなどが記されている。このうち、①の「吾院」は、惟高妙安の弟子たちの送別詩から相国寺の「普明禅院」を指すことがわかる。②の「邦君」は次節で述べるが、当時の綱寛は尼子氏家臣であるのでこの場合は尼子氏を指すと見てよい。③の「石州産銀之山城」も次節で検討するが、石見銀山の軍事拠点であった山吹城を指していると理解してよいだろう。

次に問題となるのは、綱寛はいつ頃京都に滞在していたのかという点である。惟高妙安の詩文には「今茲之夏」とあるのみでこの詩文だけではわからない。一方、惟高妙安の弟子などの送別詩からは具体的な年月が判明する。例えば、(大江) 霊

派は「永禄己未之夏」に綱寛が入洛したと記している。これは永禄二(一五五九)年に該当する。また、入洛時期については聰元の詩に「初夏」とあり、旧暦四月を指すと考えられる。加えて帰郷時期は(春江) 守陽の詩に「秋七月頃」、聰元の詩に「初秋下旬」とある。以上を踏まえると、綱寛は永禄二年四月に上洛し、同年七月に下向したことがわかる。

この時、綱寛の滞在は三ヵ月程であるが、聰元の詩には「再入洛」とあり、それ以前にも上洛した形跡がある。惟高妙安をはじめとする関係者の詩文からは、綱寛が「遊学」のため上洛して相国寺に滞在した点、惟高妙安などの京都の禅僧と深い交流を持った様子などをうかがえる。綱寛の文芸活動については、米原正義氏が仁如集堯との関係に若干触れているが⁽⁶⁾、仁如集堯は惟高妙安の門生とされることから、綱寛との繋がりが生まれたのも惟高妙安が関係している可能性が考えられる。京都禅院における綱寛の人的ネットワークは惟高妙安を起点とするものであったのではない。本史料はその一端に位置付けられるだけでなく、尼子氏家臣と京都の関係を考える際にも興味深い内容を示しているといえよう。

三、惟高妙安・米原綱寛と石見銀山

本史料にみえる米原綱寛宛て惟高妙安詩文は、文芸活動を通じた両者の交友関係を示すにとどまらない。詩文には、帰国後の綱寛が「邦君」の命で「石州産銀之山城」を守備した旨が記されているが、先に述べたように、この詩文自体は永禄二年の作成であるから、当時の「邦君」は尼子晴久を指すと考えられる。当時、尼子氏は石見国東部をめぐって毛利氏と争っており、弘治二(一五五六)年九月までには石見銀山を制圧している。制圧後、尼子氏は石見銀山の軍事拠点である山吹城に本城常光を入れたことが知られているが、長谷川博史氏によれば、本城氏に加えて、古志氏をはじめとする「雲州番衆」(尼子氏直轄軍)も城番として籠め置かれたという⁽⁷⁾。以上を踏まえると、「石州産銀之山城」とは山吹城を指すと判断してよ

いだろう。本史料の存在により、「雲州番衆」には綱寛も含まれていたことが明らかとなった。とりわけ綱寛は晴久の「寵童」とも評される人物であり、そのような性格の家臣が派遣されていた事実は、「雲州番衆」が本城氏を監視する役割を負っていたとする長谷川博史氏の指摘にも繋がるのではなからうか。このように、尼子氏と山吹城の関係を知る際に重要な情報を提供しているといえよう。

次に注目したいのは、京都の惟高妙安は遠く離れている石見銀山の綱寛に関する情報を入手しているという点である。「時有便属、繫一詩於其牋」ともあり、惟高妙安と綱寛の間で連絡を取り合うことが可能であった。京都・石見銀山間で相互に連絡できる環境が築かれていた点は興味深い。倉恒康一氏は、惟高妙安の関係史料にみえる石見銀山の様子について実際に見たのではなく、帰京後の伝聞情報に基づく可能性を指摘している。綱寛との交流の実態を踏まえると、帰京後も惟高妙安は山陰地方の関係者から随時情報を得ており、惟高妙安が有した石見銀山に関する情報・知識も同様のルートで入手したと捉えてよいだろう。

前述のとおり、京都から出雲に呼び戻された綱寛は、晴久の指示で石見銀山の山吹城に在番していた。このことはその後の綱寛の動向にも影響したことが想定される。綱寛は永禄五（一五六二）年、一転して毛利方へ離反しているが、この背景に山吹城番をつとめていた影響を考慮することができらるだろう。例えば、山吹城番の本城常光は在番中より毛利氏へ帰属するよう勧誘を受けており、実際に永禄五年に投降している。また、永禄三年頃と推測される山吹城番の調略に関する毛利氏の史料には次のようにみえる。

御状具拝見候、示給趣速承知候、誠不思儀与申様にて候、

（中略）

一、此次をもつて、雲之番衆之内、古志を初として、五人之内、此方へちともぬき口にも候する衆を、引候て見候而くれ候へかしと可被仰候、彼松かわを便にして、御ひき候て御らんあるへしと、さいなき事、又彼衆之内

にも尼を恨候衆も候はんや二候、暮々雲番衆・本事引分候様共ハ努々有間敷候へとも、もし、物のふしきにて、さ様之事も候はん時は、此方へ成そうに候するかたを、町人をもよほし候て合力候はん事可然之由、可被仰まで二て候、其分計にて可有御返候、恐々謹言、

（永禄三年乙未）
七月廿二日

隆元判

元就判

元春 まいる 御返報（8）

この史料は毛利元就・隆元父子が吉川元春に対して送った連署書状写であるが、既に長谷川博史氏が指摘するように後世の写しでもあり、難解な史料である。ただし、傍線部にあるように「雲之番衆」五名のうち、毛利氏へ寝返りそうな者を調略せよとあり、本城氏以外の在番衆にも調略は及んでいたことは確かであろう。このように、対毛利氏の最前線に位置する山吹城は同時に毛利氏による調略の対象になっていたのであり、後に離反する綱寛もこの時、毛利氏との接点を持った可能性は十分に考えられる（9）。

おわりに

以上、本稿では戦国期の五山文学関係史料に収められている惟高妙安の漢詩文を紹介したが、本史料は単なる文化交流のみならず、惟高妙安の情報網や尼子氏・石見銀山をめぐる情勢等とも深く関係していることが読み取れる。今後はこのような禅宗関係史料も視野に入れつつ、史料収集に努める必要がある。かかる点は継続して取り組まなければならない課題として掲げておきたい。

最後になるが、本稿で紹介した詩文の行方を述べておく。この詩文は京都の惟高妙安から石見銀山の綱寛宛てに送られたことが分かるが、綱寛の子孫の家に伝わった文書群の中には惟高妙安による詩軸が含まれていた¹⁰。米原文書と呼称される該当文書群については、柳原敏昭氏が詳細な考察を加えているが、近世津和野藩士

の米原氏を経て、その親類である森氏（森鷗外の親族）に伝来したという⁽¹¹⁾。現在は東北大学附属図書館が原本の一部を所蔵しているほか、東京大学史料編纂所には昭和四（一九二九）年に作成された影写本が存在する。惟高妙安の詩軸原本の所在は今のところ確認できていないが、東京大学史料編纂所の影写本を確認すると、「惟高詩集」掲載詩文とほぼ同一の文章であることが分かる。以上を踏まえると、「惟高詩集」掲載詩文は、惟高妙安が米原綱寛宛てに作成した詩軸を石見銀山へ送付する前に京都で筆写したものと指摘できよう。そして、その詩軸を受け取った米原氏は代々保管し続け、昭和初期まで米原文書の中に伝来していたのである。

【注】

- (1) 井上寛司「あとがき」（大田市教育委員会編『中世大田・石見銀山関係史料集』大田市・大田市教育委員会、二〇一九年）。
- (2) 惟高妙安に関しては、今枝愛真「玉塵の著者について」（『日本歴史』八四号、一九五五年）、柳田征司「詩学大成抄の国語学的研究〈研究編〉」（清文堂出版、一九七五年）、藤岡大拙「惟高妙安と尼子氏」（『島根地方史論攷』ぎょうせい、一九八七年）、倉恒康一「抄物資料に見える戦国期山陰地域関連記事について」（『鳥取地域史研究』一五号、二〇一三年）等参照。以下、本稿で引用する柳田・倉恒両氏の見解はこれら書籍・論文に拠る。
- (3) 『大館常興日記』天文九年五月一〇日条。
- (4) 前掲注（2）柳田著書、朝倉尚「『惟高詩集』（内閣文庫所蔵）所収景徐周麟関係文明期詩会資料について」（『禅林の文学 詩会とその周辺』清文堂出版、二〇〇四年）。以下、本稿で引用する朝倉氏の見解は本論文に拠る。
- (5) 米原氏の先行研究は、藤岡大拙「米原氏について」（前掲注「2」著書）、西島太郎「米原綱寛」（藤岡大拙監修『島根県の合戦』いき出版、二〇一八年）等。
- (6) 米原正義「出雲尼子氏の文芸」（『戦国武士と文芸の研究』桜楓社、一九七六年）。

- (7) 長谷川博史「戦国期の地域権力と石見銀山」（『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』四号、二〇一四年）。以下、本稿で引用する長谷川氏の見解は本論文に拠る。

- (8) 『中世大田・石見銀山関係史料集』五一〇号。なお、封紙ウワ書部分は省略している。

- (9) 参考史料であるが、米原氏系図の注記によれば、綱寛は「聖護院宮」の仲介で元就の下へ離反したという（東京大学史料編纂所影写本「米原文書」所収系図）。

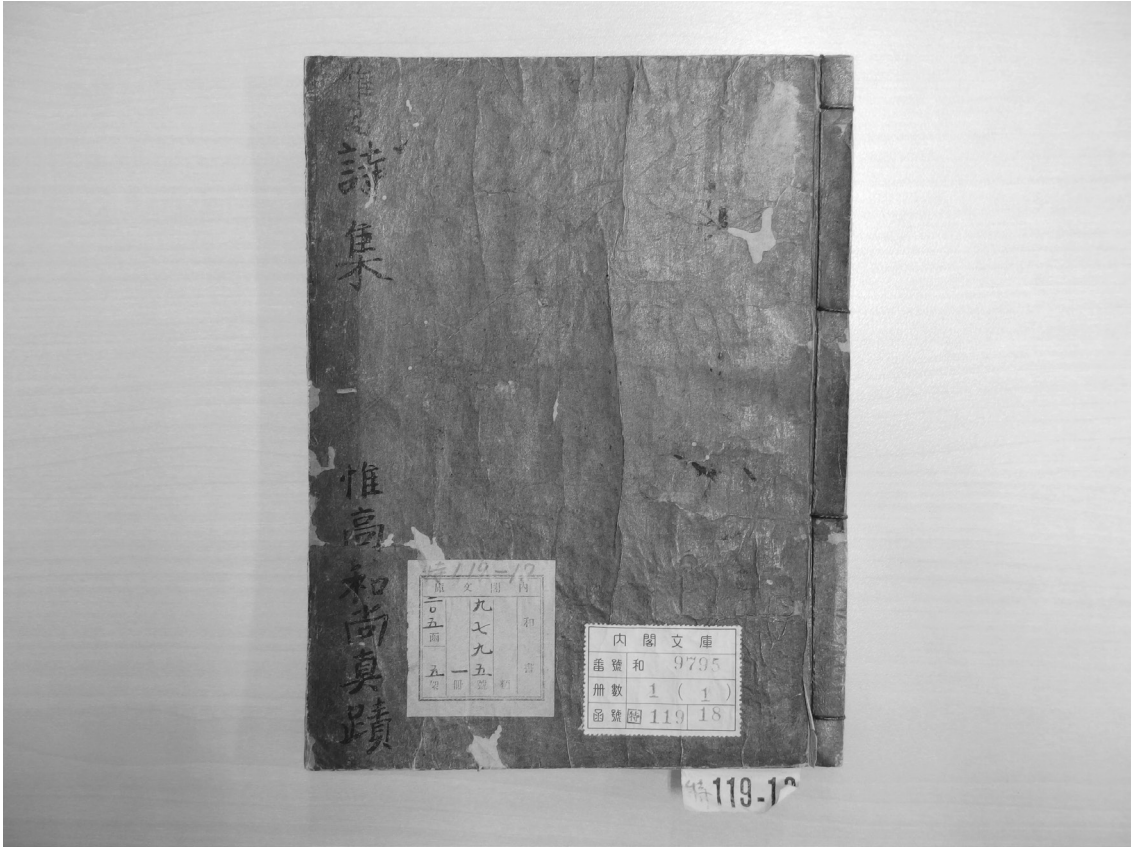
- (10) 前掲注（9）「米原文書」所収。

- (11) 柳原敏昭「東北大学附属図書館所蔵『森潤三郎氏旧蔵米原文書』小考」（入間田宣夫編『東北中世史の研究下巻』高志書院、二〇〇五年）。

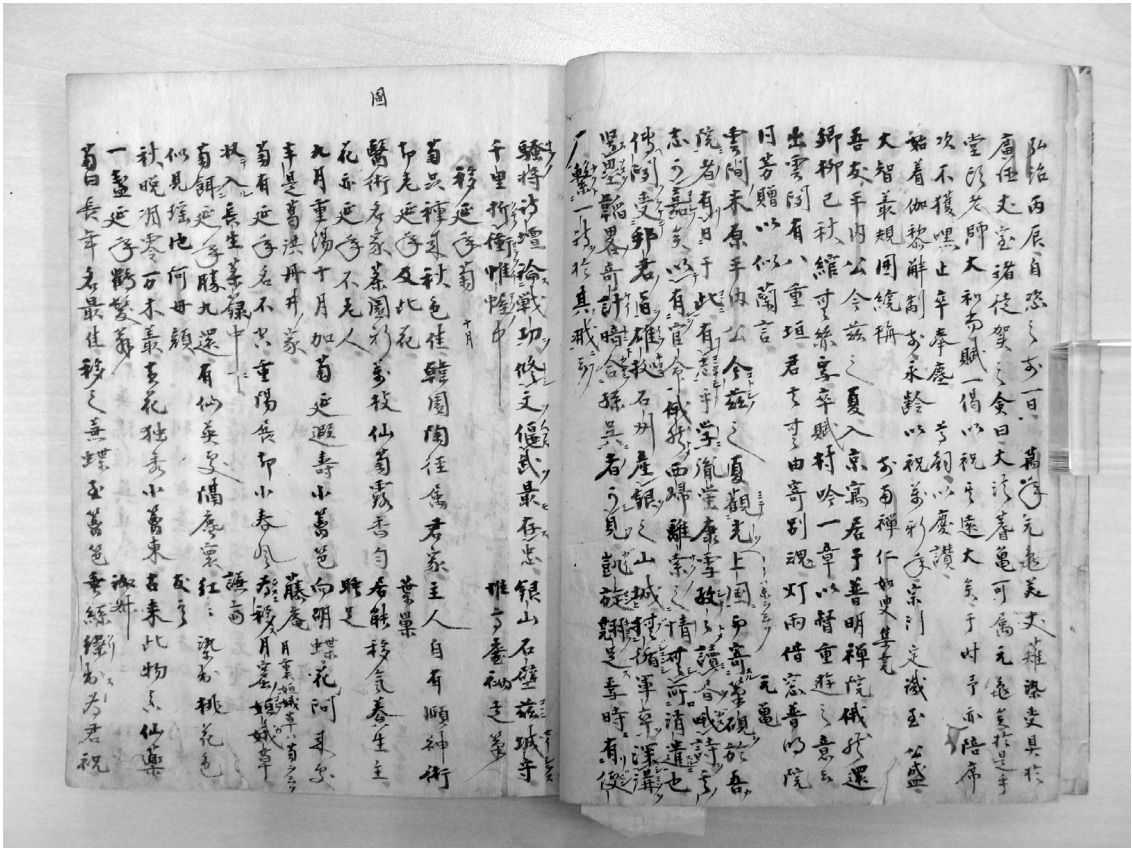
【付記】

本史料の存在については、早稲田大学商学部講師・米谷均氏ならびに島根県立古代出雲歴史博物館主任学芸員・倉恒康一氏のご教示を賜りました。末尾ながら厚く御礼申し上げます。

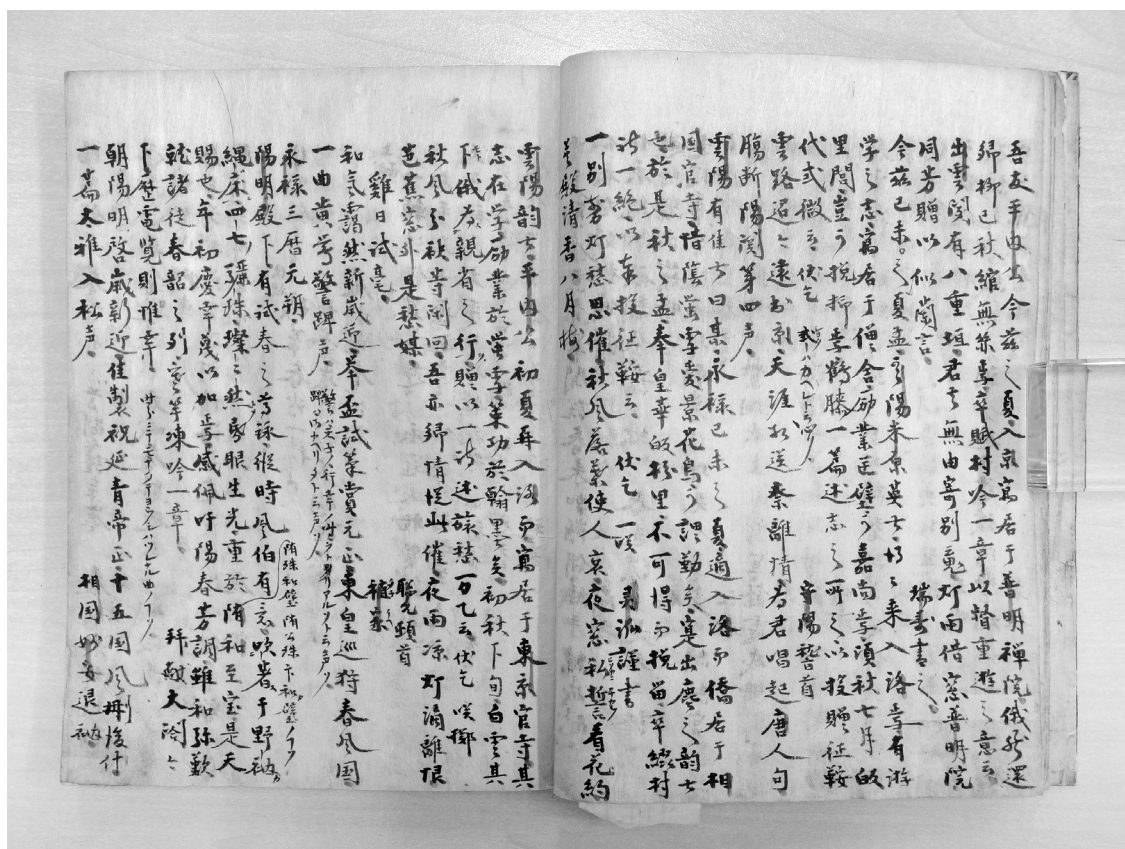
【史料写真】（筆者撮影）



(1)『惟高詩集』表紙



(2) 惟高妙安の詩文（写真中央付近）



(3) 大江霊派らによる米原綱寛の送別詩

史料紹介 島根県立古代出雲歴史博物館所蔵の「銀山由来記」

鳥谷 芳雄

はじめに

ここに紹介するのは、「銀山由来記」と題された、島根県立古代出雲歴史博物館が所蔵する未報告史料である（以下、本史料とする）⁽¹⁾。本史料は文政元年（二八〇四）に筆写されたものであるが、表紙に「元和年中控置」とあるように、成立年代がさかのぼれることから、「銀山旧記」の古いタイプの類本として貴重である。ここで全文を翻刻するとともに、類本と比較しながらその特徴について若干の考察を行ってみたい。

一・本史料の概要と本文内容

本史料は、表紙に「元和年中控置／銀山由来記／永井氏」とあるもので、内題は「石陽銀山由来記」である。縦二五・〇cm、横一七・四cm、厚さは五mmほどである。

紙数は表紙・裏表紙を含めて全部で三〇丁。表紙をめくると、内題とともに本文が一二丁分つき、その後一五丁分の白をはさんで奥書の一丁分となる。一三丁目の内側には罫紙が差し込まれたまま残る。縦二四・二cm、横一五・四cmで、罫線の幅は二・五cmほどである。

奥書から、本史料は文政元年（一八〇四）正月に永井金治郎によって書写されたものと知られる。表紙にもみえるこの永井氏は、現段階で詳らかにできないが、安政二年（一八五五）の「浜田藩中御名録」に永井姓が数名みられることから、浜田藩士であった可能性が高い⁽²⁾。

また奥書によると、本史料は元和年中（一六一五～二四）に当家で書き置かれたもので、その後支配の代替わり毎に書き足されてきたという。前半の由来記の部分（以下でいう本文①に相当する）がもとからあるもので、後半の奉行・代官の交替年譜の部分（以下でいう本文④に相当する）が追々に書き足されたのであろう。しかし、近年殊のほか紙が傷み、文字が分かりかねるようになったので、この年の正月、宗左衛門代の倅金治郎が新しく書きかえたとする。そのうえで、これからも当家が続くようであれば、先々まで支配の代替わり毎に書き足すよう添えてある。

このように、奥書からは本史料を筆写した人物、年代、経緯が知られるが、まずはこれが元和年中から筆写されたものであることが注意される。なぜなら、のちに写し替えられたとはいえ⁽³⁾、「おべに孫右衛門縁起」などで知られる初期のものを除けば、「銀山旧記」の類本の中にあつていまのところもっとも古いと分かるからである⁽⁴⁾。

次に、本史料の内容と記載順序の概略である。内容は、大きくは銀山の歴史を扱った部分と、歴代領主、奉行代官の年譜を記した部分の二つから成っている。そのうえでもう少し具体的にみると、前者は次の二つの内容に分かれる。

一つは、冒頭が「抑銀山仙之山に白銀取初めの由来ハ」ではじまるもので、銀山開発の流れと支配の移り変わりが一とおり記される。すなわち、建始二年⁽⁵⁾（一二七六）の蒙古の使者殺害から説き起こされてから、元亀二年（一五七二）に毛利元就が七五才で亡くなるところで終わるものである。銀山物語の大部分をなし、二丁表から六丁表までつかって語られる（本文①の部分とする。以下同じ）。

もう一つは、その後すぐにつづくもので、文字数はすくないが、もう一度大永年間にさかのぼった記事をのせる。すなわち、大永二年（一五二二）、雲州田儀の三嶋清右衛門尉が、吉田与三右衛門、同藤左衛門および於紅孫右衛門の三人を連れて銀山に向き、銀鑓を掘らせた物語である。また、その流れで翌年には吉田両名と孫右衛門が口論となり孫右衛門が自害したと記す。するとこの怨念が祟って二人をはじめ諸人が煩ったので、社を立て山神として祀ったとある。六丁裏と七丁表の一部にかけた記事である（本文②の部分）。

そのあとは、一三丁裏まで、基本すべて一つ書きで表される。ただし、最初の二行は先の山神社や神宮寺についての関連記事であり、後につづくものとは性格を異にする（本文③の部分）。そして三行目からは同じ一つ書きでも年譜形式をとり、毛利輝元、豊臣秀吉の治世に始まって、江戸時代に移ってからの代々の銀山奉行・代官の名と在任期間を列記する（本文④の部分）。付箋の根本善左衛門を含めると文政十三年（一八三〇）まで記録されていて、奥書の日付以降も追加記入されていることが分かる。その後一五丁分の白紙をおいて、二九丁表から同裏にかけて奥書があるのは、すでに記したとおりである（本文⑤の部分）。

以上が本史料の概要であり、全体が本文①から本文⑤の部分により成っていると分かる。こうした中であって、すでに本文⑤の部分（奥書）に注目したが、同様に注意されるのが本文①の部分である。なぜなら、本史料が元和年中には形成されていたと分かったことで、「銀山旧記」（由来記）がこの時点でのどのように記されているのか、その内容なり書き振りが注目されるからである。そこで次には、主にこの本文①の部分について類本と比較しながら特色をみてみたいと思う。

二・類本との比較における差異

「銀山旧記」の成立・系譜をめぐっては、類本が「イ」から「リ」まで、およそ九タイプに分類されて系統付けられている⁽⁵⁾。本史料が古いタイプのものという

には、これらのうちのどれと類似し、またどのような差異があるのか、明らかにする必要がある。

本文①の部分が、筆写年代や物語の完成度からみて、「イ」系統本より前の段階のものであることは容易に判断できる。そのうえで記載の内容や表現方法から大づかみでとらえてみることになるが、本史料は「二」系統本もしくは「リ」系統本（以下、両系統本という）に通じているといえるものである。なぜならこの点も両系統本と読み比べればすぐに理解できるところであり、特に説明を要しないであろう。よって、双方は近い関係にあるといって差し支えないが、同時に異なる点が指摘でき、そこに双方の関係性（前後関係）がうかがえて注意される。

双方を比べると、全体として文章量に差がある。すなわち、両系統本に比べ、本史料は明らかに少ないと知られる。まず注目されるのが、両系統本に載るいくつかの記事が、本史料ではまとまってみられない点である。これは物語の構成要素、ひいては由来記全体の豊かさに関わる問題であり、一番に注目されてよいものである。両系統本では、永禄年間までのところで尼子・毛利氏・小笠原氏によって繰り返される、いわゆる銀山争奪戦について語られる箇所がある。しかし、本文①の部分ではしばらく天文年間における事象を記すと、小笠原氏は登場しないまま、すぐに永禄年間における話題に移行する。

それに、時代が前後するが、両系統本には天文二年（一五三三）に神屋寿貞が博多の宗丹慶寿を呼んで、銀山で銀の吹分けを始めたとする記事がある。「銀山旧記」にあつてこれは銀山開発における吹大工の動向にかかわる重要な要素である。しかし、のちの大内・尼子氏時代の大工采女之丞・大蔵之丞らのことや、毛利元就の死後、輝元になってから吹き大工となった房宗のことも含め、本文①の部分にはみられない。

また、もう一つの差異として、個別の文章におけるいわば表現上の違いがあげられる。どういふことかといえば、次の「二」系統本の「銀山記」⁽⁶⁾を部分引用す

ることで確認してみたい。

(a)・・・はるはる本朝へ来りし其報謝となし帰らすへしと託宣有之、依て仙の

山深谷へ踏入見れハ、岩間に白銀湧出て夥敷有之故に、是を取得て軍勢に与へ本国へ帰しけり、是よりして銀山と号して永々宝山とハ成れり、・・・

(b)・・・此時に至り千の山に湧出る白銀を取尽すと云へり、然レ共底に掘入事をしらす、地上に湧出せし白銀丈取つくせし也、

(c)・・・其時迄船積する所ハ枯柳軒ケ岩屋に船を着す、右津江寿貞弁財天を勧請す、依而福地となり、家数千軒を並ぶ、

翻刻文(後掲)の該当箇所と比較すると、いずれの部分も前後の文章がほぼ共通する。しかし、同時に本史料には傍線を入れた部分がないことが確認できる。具体例まで示さないが、この違いは「二」系統本にもほぼ共通するものである。

双方の比較でしかないが、文章が長めの両系統本は文章が通っていて、話の筋や状況が分かりやすいものとなっている。しかし、これに比べ本史料は短めであって、話の運びに少し飛躍もあれば、文章表現に物足りなさを感じるものである。どちらかといえば、両系統本の方が文章力に長けていて、表現に幅があるといつてよいであろう。

こうして本文①の部分に注目してみると、本史料は両系統本と類似するものの、同時にかなりの差異があると指摘できる。一つは物語の構成要素の多少であり、もう一つは文章の表現方法・表現力の違いである。両系統本に比べ本史料は、のちの「銀山旧記」にも組み込まれている幾つか大事な物語要素が欠け、物語が限定的なものとなっているかと思われる。また、由来記を語るうえで表現力が弱く、文章にそれほど冴えが感じられないと指摘してもよいであろう。

三、両系統本の前後関係と本史料の位置づけ

前述した双方の差異は、両者の成立年代が関係していて、そのずれから生じたも

のではないかと考える。そこで次は双方をあらためて時間軸で検討してみたいと思う。

本史料は元和年間にはすでにあったと知られたが、両系統本は年代的にどう理解されているかである。「リ」系統本の写本は、いま分かる範囲では遡っても元禄(二六八八―一七〇四)初年ごろあたりであり、これ以上古いものは知られていない。また、「二」系統本は奥付に天明六年(一七八六)の日付をもつのが特徴とされていて(7)、これもそれほど極端には遡らないとみられる。となれば、両系統本は本史料よりも遅れて成立した可能性が高い。

また、この両系統本にあつては物語中、銀山攻防戦が小笠原氏を含んで語られるが、これは当地域の軍記物である「三原丸山伝記」の記述を踏まえて成立したことが指摘され(8)、のちの「イ」系統本に引き継がれる大事な物語要素の一つである。ではこの伝記がいつまで遡れるかであるが、延宝七年(一六七九)の写本がいまのところもつとも古いとされ(9)、この点も両系統の上限を考えるうえで参考になるう。

両系統本は、本史料と近い関係にあるとはいえ、これらを踏まえれば本史料ほど成立は古くなく、後出のものとみることが可能である。となれば、逆に本史料はそれに先行し、記事は記事で両系統本より古い様相を伝えるものとみることができよう。

双方を比較したときに、ある文章なり記事が先行する本史料になくて後出の両系統本にあるのを、あとでより説明的で補足的な文章に変わった、あるいはそれまで含まれなかった別の記事が加えられたからと考えるのはごく自然である。またそうとらえることで双方の相違点が容易に説明できるものと思われる。先に両系統本は「三原丸山伝記」との関係で成立したことに触れたが、これをもう一度例に挙げれば、本史料はそれを取り込む以前のものであったということになるう。

因みに、これは両系統本についていえることである。この系統本は本文とは別に

「銀山細説」や「銀山始細記」、あるいは単に「追記」といったかたちで追加記事が伴うことを特徴とする。それは「おべに孫右衛門縁起」などにみる、いわゆる初期段階の幾つかの要素が、一つ書きのまま、あるいは集約されて記事となったものである⁽¹⁰⁾。

これと比較したとき、本史料はこうした追加記事を伴わないことでも両系統本とは異なっている。しかし、双方に全く接点がないというわけではない。唯一、於紅孫右衛門に関係した事柄、つまり本文②の部分は共通するのである。

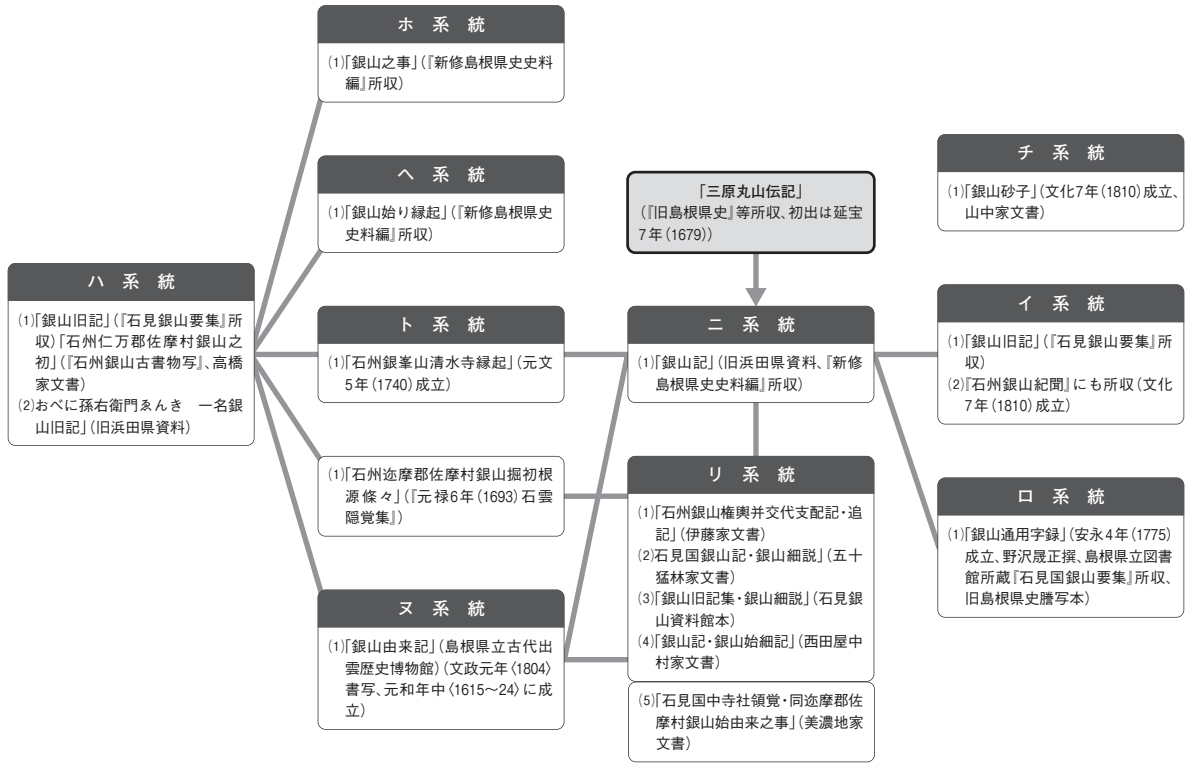
本史料において、本文①につづいて本文②の部分が（それに本文③の部分も含めて考えてよいと思われる）補足的に継ぎ足されているのは、両系統本における追加記事と同じような意識が働いているからではなからうか。すなわち本文中では扱わなかったものの記録として落せない重要な事柄との認識があったとみられるのである。

とはいえ、本史料は於紅孫右衛門に関係した縁起譚のみを扱っていて、記事が両系統本ほどに取り込めていないのは明らかである。その取り上げ様は極めて限定的であり、こうしたところにも本史料の古い様相が表れていると思われる。

ここまでの検討から、本史料は成立年代上も記事の内容上からも、両系統本に先行して存在したと考えてよいものである。そして、近しい関係にありながら双方に差異があるのは、両系統本が本史料の内容を継承しつつも文章表現を変えたり、新たに物語の要素を加えたことに原因すると説明できるように思われる。また、別のいい方になるが、本史料は両系統本やのちの「銀山旧記」からすればなお未熟な段階のものであった、逆に両系統本は本史料からすれば物語がより充実する方向にあったといえるではなからうか。

おわりに

繰り返すが、本史料は近い関係にあるとみられる両系統本とも異なることが明らか



かになった。よってこれと同じグループで扱うのは適当でないと知られたのではなからうか。そこで本史料についても新たに系統立てるのがよいと考え、便宜的に「ヌ」系統本と呼ぶことを提起したいと思う。挿図は本史料を含んでいまの段階で想定される他の類本との相関関係を表したものである⁽¹¹⁾。「銀山旧記」の成立・系譜をめぐっては、他本の要素も取り込みながら、複数のテキストが折り重なるようにして形成されたと指摘されている⁽¹²⁾。したがってこの図ほど単純な関係にはないようにも思われる。しかし、といいつつも、これまで行なった検討、とくに今回のことを踏まえると、最終的な完成形である「イ」系統本からみたとき、両系統本や本史料とつながるラインは、他のそれに比べて太く結びつくように思われる。そうであれば、このラインを少し強調してよいかと考えるのである。全体的な流れを含めて、この問題はなお検討が必要であり、引き続き課題としてたい考えである。

最後になったが、本史料を紹介するに当たり、お世話になった島根県立古代出雲博物館様に末筆ながらお礼を申し上げます。

註

- (1) 島根県立古代出雲歴史博物館が二〇一七年度に購入した資料のうちの一つである。
- (2) 『新修島根県史 史料篇3 近世下』一九六五。御帳付・御徒士37名のうちに永井金三郎、永井左源太の名がみえる。他に大目付・御旗奉行に永井佐太夫、御徒士頭・御側取次・奥御側医・御取次常上下席に永井和右衛門、御近習に永井伝之助、大小性に永井岩太といった名がみられる。
- (3) そのためであろうか、小さなことながら、本史料には明らかに年号表記の誤りや、他の類本と食い違う表現のあるところがある。例えば、最初のところで通常人皇九十代後宇多院建治二年云々とあるところが、人王九代後宇多之宇建始云々とあったり、通常三嶋清右衛門尉らによる採掘の始まりとされる

のは大永年であるが、ここでは大永二年とあたりする点などである。もつとも最初に書写された段階でこれを前提とした別の類本がすでに存在した可能性があることも否定はできない。

- (4) 小林准士『解題 銀山旧記』（島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室、二〇〇三）でいう「ハ」系統本のことである。後掲註(5)の拙稿ではAとBがこれに該当する。
- (5) 九つの系統本は、前掲註(3)の小林氏論文が説いた「イ」・「チ」系統本に、その後に筆者が提唱した「リ」系統本を加えたものをいう。拙稿『石州銀山権輿並交替支配記』について「翻刻と類本の考察」(『古代文化研究』第23号、二〇一五)および「史料紹介 旧美濃地家文書「石見国中寺社領覚・同迹摩郡佐摩村銀山始由来之事」——「銀山旧記」類本との関連で——」(『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』8、二〇一八)を参照のこと。なお「銀山旧記」の成立・系譜をめぐる研究は、この小林氏の成果によるところが大きく、今日の研究の到達点が示されているといつてよい。
- (6) 前掲註(3)の小林氏論文を参照のこと。出典元は『島根県史史料編三』一九六五に掲載のもの。
- (7) 前掲註(3)の小林氏論文の指摘による。「二」系統本「銀山記」の奥書は「古書有之候処、処々損候故、此度写替へ置候、是者古来分有之候、／天明六丙午年閏十月廿二日」とある。ここでも古書が損じるところとなり写し替えられたとある。この場合の古書がいつまで遡るのかももう少し注意したい点ではある。
- (8) 前掲註(3)の小林氏論文の指摘による。
- (9) 前掲註(3)の小林氏論文の指摘による。
- (10) 前掲註(5)の拙稿の中で用いた相関関係表を参照のこと。A・(a)・(k)とB・(a)・(j)が、のちに例えばD・(a)・(h)のようになること

をいう。

- (11) この表は拙著『続石見銀山を読む』二〇一八に掲載した相関図であり、これをもとにして今回作成した。これも小林氏の研究成果に負うところが大きい
が、私なりに理解した表であって、同氏の理解を誤って捉えているとすれば、その責任はすべて筆者にある。

- (12) 前掲註(3)の小林氏論文の指摘である。

翻刻

(1表〈表紙〉)

元和年中控置

銀山由来記

永井氏

(2表)

石陽銀山由来記

抑銀山仙之山白銀取始し由来ハ、人王九代／後宇多之御宇、建始二曆丙子年五月蒙古之／使来ル、是を鎌倉にて殺す、同四年改元有りて／弘安辛巳年、蒙古国より軍兵式拾四万人／兵船四千艘に二而日本を勢むる、寔に神国之」(2裏) 不思議に哉、頻に神風起きて、異国の敵船／悉く海中へ沈む、残勢三萬人を博多にて殺す、／人王九拾四代花園院御宇に当て将守郡親王執事此頃／八世相模守貞時、永享年中に周防国大内助／弘幸鎌倉に恨有りて謀反を企て百済国より軍兵／を招寄せ、三韓以前之意趣をふくみ、其勢亦」(3表) 式拾萬騎船数千艘に乗り岩見国に着船ス、貞時／大きに驚き弘幸に和睦をこふといへども、弘幸勝て和／睦の色なく殿軍に達し、貞時娘弘幸一子修利／之大夫弘世にめやわすべきとし、勅定にて／石陽を相添娘をめやわす、依之和睦し／異国の軍勢国々へ可帰由申渡スといへども、以前之」(3裏) 意趣有をとつて、なかなか戦にも及はすして／帰間敷申候、時二周防之国水上山北辰星妙見／大菩薩告て玉く、石見国仙之山ニ白銀有り、是を／百済之軍兵ニあたゑかへらすべしと御託宣／有り、仙之山へ行、是を取、百済之軍勢にあたへ／帰ゑす、是を所を銀山と号ス、其後、元弘・建武」(4表) 之乱ニ、足利右兵佐直冬石見国ニ割入、佐和／三隅をはしめ、其外四拾八城を随江、国中／押領し、銀山を涌出ル白銀悉く取尽し、／上ニ有之白銀ハ退転す、其後百五拾代後／柏原院、大永年中將軍義照公之御時、／大内義興支配と成ル、其頃、雲州鷲二銅山」(4裏) 有りて其銅を買ニ九州博多神谷壽貞／往来ス、船中ニ而銀山仙之山之峯ニ銀光之雲氣立

／を見て、鷲の銅山ニ而此由を物語ス、雲州口田儀ニ／三嶋清右衛門此物語を聞、堀子を相伴し、大永／六年丙戌三月下旬仙之山に堀り入ル、夫分諸／方之商人多勢入込ミ、天文二年之頃迄五・六年之間」(5表) 鏈を博多江積出し、銀山ニ而吹分ル事なし、其／時代船往來之津ハ、枯柳柄ヶ岩に船をつなぎ、／柄ヶ岩寿貞、弁才天を建立ス、其頃柄ヶ岩ニ家数千軒余有之、永禄四年辛酉年より、毛利元／就之支配なり、平賀山城守・高畑源四郎右兩人／を山吹之域に籠置、奉行とす、しかれども、尼ヶ子方」(5裏) 須佐之高倉に手勢五千餘騎相詰、安芸ハ石見之通路をとめ、数万軒兵糧につまり／及難儀、毛利勢式万八千騎にて戦しに／毛利方打連、尼子弥勝ニなり、山吹之域に押寄、平賀／高畑ニ切腹させ、尼子分本城越中守を山吹之域ニ／籠らせ支配ス、其節ニ亦繁昌せり、雲伯」(6表) 石見無残尼子之下成り、元就武略をもつて彼越／中守を味方ニ招、亦々銀山毛利之手ニ入支配と／なる、永禄八年七月下旬、毛利分雲州富田月山ニ／押寄せ、七年之間在陣ス、時ニ越中守心替り／毛利 隨問敷所存ニ相見ゆへ、吉川元就領地と成る、元龜二年辛未六月十四日、元就七拾五才にして死去ス、」

(6裏) 大永六年丙戌三月廿三日、雲州田儀三嶋清右衛門尉、／杵築銅山分吉田与三右衛門、同姓藤左衛門、於紅孫右衛門、／右三人相伴ひ、銀山ニ罷越、鏈を堀セ、銀を吹、翌／年亥八月十一日、山敷ニ而孫右衛門口論を仕出し、／孫右衛門自果ル、時ニ怨念兩人ニ種々の祟をなし、／其外諸人を煩し無、依之山神ニ祝ひ、社を立、山」(7表) の神と号すなり、

一、山神社領五拾石

一、同所神宮寺領五石、信養坊建立、／右寺社領共に大久保石見守殿寄附也、

一、毛利輝元銀山支配、元龜二年未分天正年中迄、

一、天正年中秀吉分御上使として、近実若狭守、」(7裏) 右兩人立会所吟味之上御奉行所与成ル、

一、彦坂小形部、慶長五年分同八月迄、御奉行、

一、大久保重兵衛、同八月八日分御替り、同十三年迄御／奉行、右慶長十八年丑年分大久保石見守とし、／諸国金山銀山御奉行、同年四月廿五日ニ死去、／

是分御奉行一年替り」(8表)

一、慶長十四年酉年 永田大隅守

一、同十五年戌年 三坂枝源藏

一、同十六年亥年 増嶋左内

一、同十八年丑年分寛永十二年迄式拾貳年之間／竹村丹後守御支配

一、元和五年未年分、浜田分五万四百拾貳石五斗貳升合、」(8裏) 村数百三拾ヶ村、／古田大膳大夫重治江御引渡、／松平周防守殿江渡ス、元和三年巳年、四萬三千六拾／石六斗二升、村数百三拾ヶ村、／龜井豊前守江御引渡し、／残テ四万五千石余銀山附ト成ル、」(9表)

寛永十二年 亥年分子年迄二年 竹村藤兵衛

同十三年 子年分丑年迄二年 京極若狭守城主 雲州松江御預り

同十五年 丑年分巳年迄五年 杉田九郎兵衛

同十八年 巳年分午年迄二年 同名六之助

同十九年 午年分子年迄七年 同名又兵衛

万治三年／右支配之時、寛永二十年未年吉永領壹万石、」(9裏) 村数七ヶ村、／賀藤藏之助殿江渡ス、

寛文元丑年分戌年迄十年 山高孫兵衛 当国ニ而御死去／従是御代官所と成

同十年 戌年分／延宝三年 卯年迄六年 永田佐太夫

延宝三年 卯年分／貞享元年 亥年迄九年 柘植伝兵衛

貞享元年 亥年分／元禄五年 申年迄十年 由井長兵衛」(10表)

右支配之内、濱田式千石上地并吉永領壹万石戻り／銀山となる、高四萬七十石余村数百五拾ヶ村

元禄五年 申年分／丑年迄六年 山役此御代ニ相宛ル 後藤覚右衛門

同十一年 丑年〆／宝永四年 亥年迄十一年 井口治右衛門
 宝永四年年 亥年〆／巳年迄七年 都築小三郎
 正徳三年 巳年〆／申年迄四年 鈴木八右衛門 当国二而御死去、(10裏)
 (貼紙)「享保年中竹田喜左衛門様御支配之節猪鹿荒候ニ付／田畑へ入組候、山林松
 木雜木共ニ伐拂御願申上、且又山御役目／引方御願申上、上納銀高二而御
 料一□半現引方被仰付也」
 享保元 申年ヨリ／辰年迄九年 竹田喜左衛門
 同九年 辰年從／未年迄四年 窪嶋作右衛門
 同十二年 未年從／亥年迄五年 海上弥兵衛
 同十六年 亥年〆／丑年迄三年 此御代從瑞玖竿御免許有 井戸平左衛門 備中上
 下二而御死去、
 同十八年 丑年〆／辰年迄四年 布施弥市郎様
 元文二年 巳年ヨリ／亥年迄七年 関忠太夫様 当国二而御死去、(11表)
 延享元年 子年〆／丑年迄二年 平岡彦兵衛様
 同三年 寅年〆／寛延元 辰年迄四年 佐々新重良様
 寛延二年 巳年ヨリ／宝暦四年 戌年迄六年 天野助次郎様
 同 戌年ヨリ 備中笠岡 浅岡彦四郎様
 同 七年 丑年〆八寅迄 内方鉄五郎様
 同八年 寅ヨリ／十二年 午迄五年 遠藤兵右衛門様(11裏)
 同十二年 午年〆／明和四年 亥迄六年 川崎平右衛門様
 明和四年 亥年〆／同 六年 丑迄三年 川崎市之進様／地方銀山方兼而
 同 六年 丑ヨリ／安永七年 戌迄十年 川崎市之進様／銀山方斗り、
 明和六年 丑ヨリ／安永六年 酉迄九年 会田伊右衛門様／地方
 備中笠岡／御代官 安永六年酉年／御預り 野村彦兵衛様
 同 蔵敷 花木伝次郎様(12表)

安永六年 酉ヨリ／同九年 子迄四年 蓑笠之助様
 同九年 子ヨリ／天明七年 未迄八年 川崎平右衛門様／地方銀山方兼而
 (貼紙)「天明七未〆寛政二戌迄四年 蓑笠之助様／銀山方八川崎様御支配□□□□
 御門地方／付未十二月銀方山一円被仰付」
 寛政二 戌年ヨリ／同六 寅迄五年 菅谷弥五郎様
 同六年 寅ヨリ／文化元年 子迄十一年 大岡源右衛門様
 同元年 子ヨリ／同七年 午迄七年 上野四郎三郎様
 同七年 午七月〆／十一月マデ御預り 作州久世御代官 山田常右衛門様(12裏)
 文化七年 午十一月ヨリ／同十年 酉十月迄四年 前沢藤十郎様 当国二而御死
 去、
 同 十年 酉七月〆／同十一年 戌二月迄二年 備中倉敷御代官御預り 大原四
 良右衛門様
 同十一年 戌二月〆／文政四年 巳十月迄八年 阿久沢修理 文政四年巳七月当
 国二而御死去同断 / 当御代ニ御見取御檢地有之御高入ニ相成申候、
 同四年 巳十月ヨリ／十二月廿七日迄 備中倉敷御代官御預り 大草太郎右馬様
 文政四年 巳十二月〆／同十二年 丑六月マデ九年 大岡源右衛門様(13表)
 大岡源右衛門様文政十一子二月江戸表へ中登り被遊候二付、当秋御檢見二者／為御
 代官丹波久美濱御代官箕笠之助様御出仕為遊候、其節檢見村／当組二而ハ、下川戸・
 本領・下村・上村・以上四カ村御檢見被為遊候、／右源右衛門様／当料御支配中工
 事出入数之江戸表へ御差出二被成、且又／綾帆船破船取斗方不行届、猶又当料社倉
 官位之儀／取斗方宣しからざるに付、社倉江戸表へ被下り御訴訟／申し上、彼是騒
 動仕御呼登二相成、其後御帰陣無之其俣／御替二相成申候、御同人様段々当国二而
 取斗方不行届二而／御代官職取上ケニ相成、纔七人扶持二而御弓之稽古頭／を被成
 候風聞有之候(13裏)

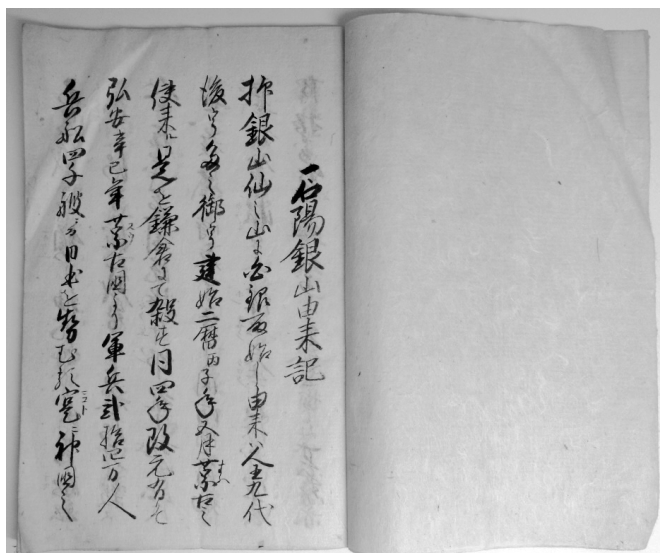
文政十二年 丑六月ヨリ／同十二月迄 丹波久美浜御代官御預り 蓑笠之助様、(以下、5行分が白) (14表、白)

(付箋) 「文政十三年寅正月從／根本善左衛門様」 (14裏から28裏まで白) (29表)

右由来記、元和年中之頃、永井氏／当家何某代々題号仕立置候二付、当家世代之もの共
／御支配御勤中年限御代替り／巨細二書記置申し候處、近來紙殊之外損じ、文字相分り兼候文字」 (29裏 数ヶ所有之候二付、于時文政元年寅正中、永井宗左衛門代二、忤金治郎写かへ仕候間、／当家世代相継候ものハ、向後まで御支配様御代かわり事二者書記／可被置もの也、

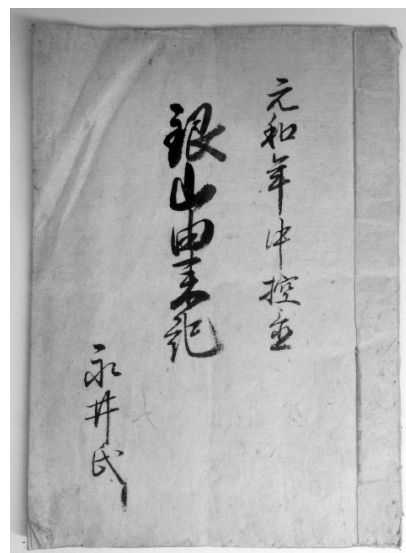
文政元寅正月日 永井金治郎写之置」

(30表・裏〈裏表紙〉、白)

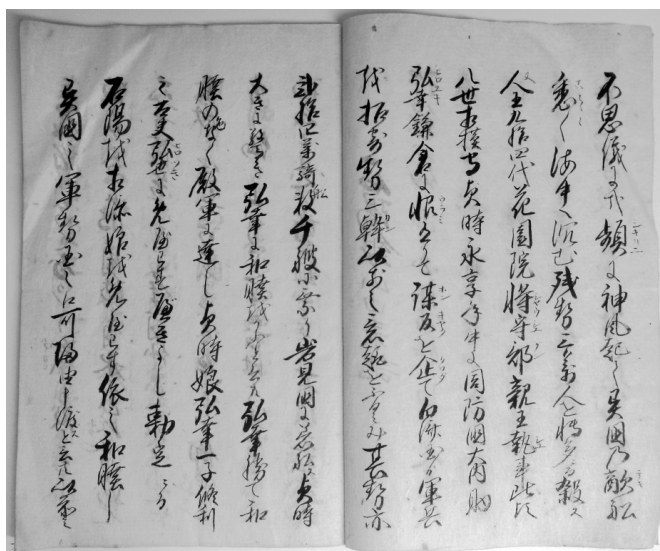


2 表

1 裏



1 表 (表紙)



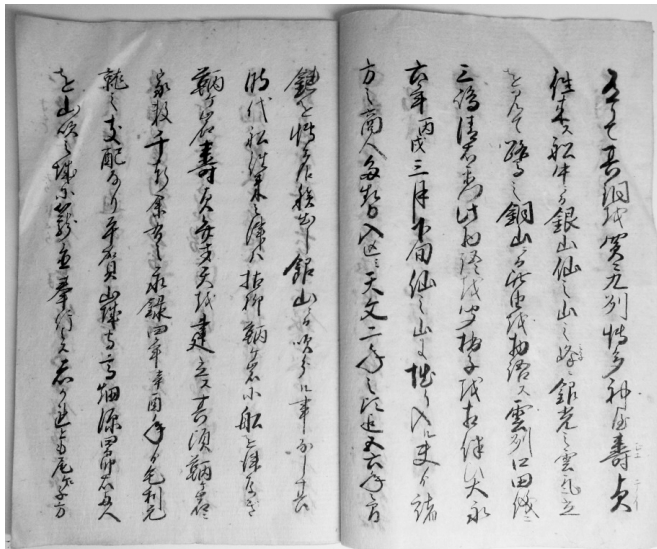
3 表

2 裏



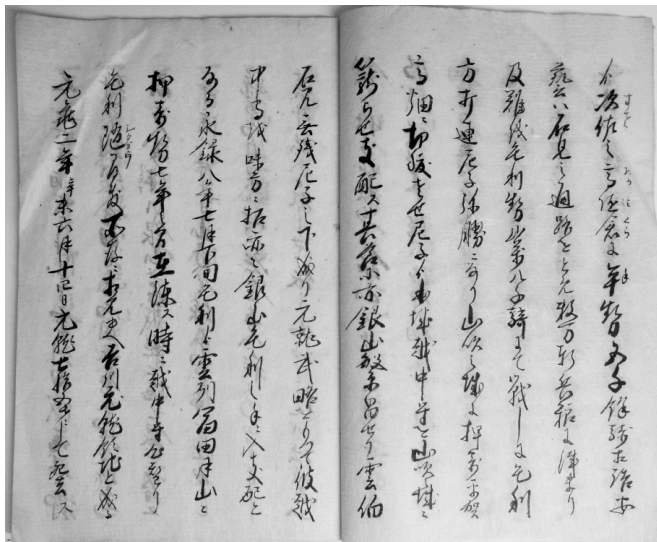
4 表

3 裏



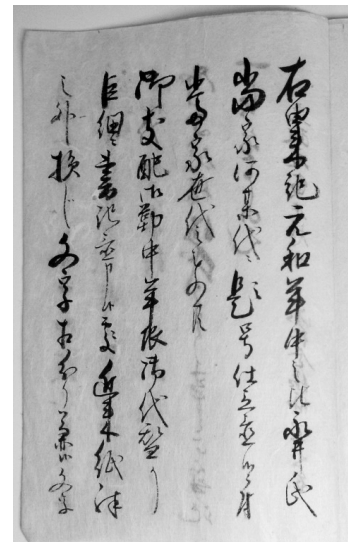
5 表

4 裏

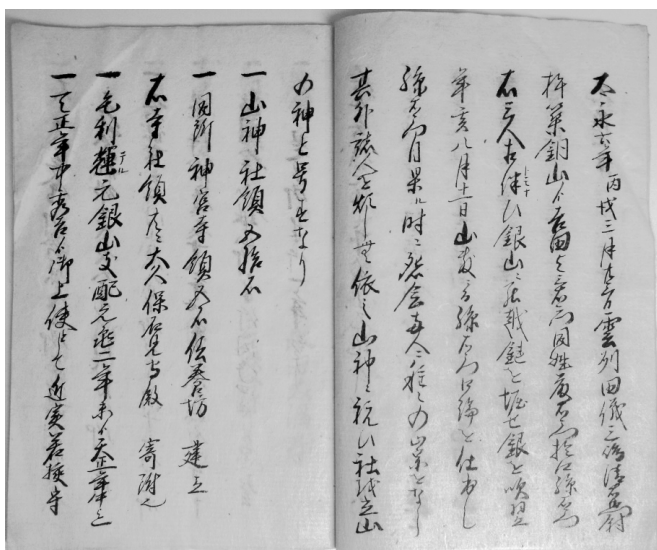


6 表

5 裏

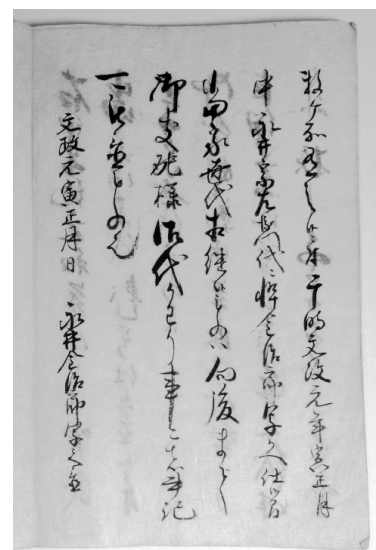


29 表



7 表

6 裏



29 裏

世界遺産石見銀山遺跡の調査研究 10

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 10

編 集 島根県教育委員会（松江市殿町1番地）
大田市教育委員会（大田市大田町大田口1111番地）

発 行 島根県教育委員会
島根県教育庁文化財課世界遺産室（TEL0852-22-5642）
URL <http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/>

発行日 令和2（2020）年3月31日

印 刷 株式会社 報 光 社

